

## 主語不一致ジェロンディフについて

渡 邊 淳 也

### 1. はじめに<sup>1</sup>

この論文は、暗黙にされた意味上の主語が、ジェロンディフ句<sup>2</sup>がかかる節（典型的には主節であるが、従属節にかかるジェロンディフもあるので、この節を支配節（*proposition régissante*）とよぶことにする）の主語と同一指示にならないジェロンディフ（以下、「主語不一致ジェロンディフ」という）<sup>3</sup>について論じることを目的とする。具体的には、つぎの(1)～(5)のような例が主語不一致ジェロンディフである<sup>4</sup>。

- (1) L'appétit vient **en mangeant**, la soif s'en va **en buvant**. (Rabelais, *Gargantua*) 食欲は食べていると来るが、乾きは飲んでいると去る。
- (2) **En écoutant** ses paroles, sa sincérité m'a frappé. (木内2005, p.41) かれのことはをきいていると, その真摯さに感動した。(直訳: その真摯さがわたしを打った。)
- (3) Le bonheur s'obtient **en n'y pensant pas**. (Montherlant, cité dans Wagner et Pinchon 1962, p.315) 幸せは、幸せを考えないでいると得られる。
- (4) Sur la gauche, **en remontant** la rue, juste après un autre bar qui fait angle avec le quai, se dresse un hôtel de trois étages [...] (Fellag, cité dans Halmøy 2003, p.122) 通りをさかのぼってゆくと, 左手に、川岸にむかう角にあるもう一軒のバーのすぐ後に、4階建てのホテルがそびえている。
- (5) Au Prado, on s'est séparés à l'entrée pour voir les salles chacun de son côté. **En le retrouvant** à la sortie dans les jardins, il était avec un homme, il s'était fait alpaguer par un pédophile. (H. Guibert, *Fou de Vincent*) プラド美術館で、ぼくたちは入口でわかれ、それぞれに展示室を見に行くことにした。庭園への出口で彼とまた落ちあうと, 彼はひとりの男といた。少年愛者に言いよられていたのだ。

ジェロンディフについての総論的考察は、すでに渡邊(2011 b)において詳細に行なったところであるが、主語不一致ジェロンディフがどのようにして成りたつのかに関しては、(6)のように簡単に述べただけで、残された課題のひとつであった。

- (6) 「ジェロンディフが主節の事態の経験者（明示されるときは[(2)]のように目的補語としてあらわれるが、とくに示されていなくても潜在している）にかかるときに、同一主語の制約が解除される傾向があることから、経験者と発話者との視点同化の問題として考えることができると予想している」  
(渡邊 2011 b, pp.172-173)

本稿では、(6)で略述しておいた考えの延長線上で、主語不一致ジェロンディフに特化した詳細な議論をおこないたい。

以下の論述は、つぎに示すような手順からなっている。まず2節で、主語一致の規範とその限界について確認する。つぎに3節で、主語不一致ジェロンディフに関する先行研究を検討する。4節で、本稿筆者が行なったコーパス調査について報告するとともに、その結果の解釈をこころみる。5節では、主語不一致ジェロンディフを可能にする諸要因について考察する。

## 2. 「主語一致」という規範について

規範文法においては、一般的に、ジェロンディフの暗黙の主語を、支配節の主語と一致させることが要求されている。たとえば、つぎの引用をみよう。

- (7) « Il est souhaitable, notamment, que le participe ou le gérondif détachés, surtout en tête d'une phrase ou d'une proposition, aient comme support le sujet de cette phrase et de cette proposition : [...] »

(Grevisse 1993<sup>13</sup>, p.1306, § .885)

「とりわけ、遊離位置の分詞やジェロンディフは、とくに文や節のはじめにおくとき、その文や節の主語を支え〔＝意味上の主語〕とすることがのぞましい」

この規範にあわない例については、ときに熟語的な固定表現とされることが

ある。

- (8) 「ジェロンディフは主動詞の主語を動作主とするが、諺、格言などではジェロンディフの動作主と主動詞の主語が異なることがある。」

(目黒 2000, p.297)

しかしながら、諺や格言ではなく、からなずしも熟語的ではないにもかかわらず、この規範に合致していない例は少なからず存在し、ある程度の生産性があるように思われる。規範文法が敬意をはらう古典主義時代の作家の文にも、主語不一致ジェロンディフの例は多くみられる。そのせいか、Martinon (1927) や Frei (1929) のような規範主義的な著作においても、主語不一致ジェロンディフを一般的には好ましくないとしながらも、部分的には認めるという、いささか歯切れのわるいもの言いになっている。Martinon (1927) は、(9)、(10) のような例をあげながらも、かろうじて (11) のように言っている。

- (9) La fortune vient **en dormant**. (*ibidem*, p.468) 富は寝ているうちに来る。

- (10) À gauche **en entrant** il y a... (*ad loc.*) 入って左に... がある。

- (11) « [...] mais encore faut-il qu'il n'y ait aucune équivoque possible, et au surplus il ne faut user de cette liberté qu'avec réserve, surtout quand le participe est précédé de *en*. » (*ad loc.*)

「[...] しかしながら、いかなる曖昧性もありえないようにしないといけない。さらに、とくに分詞が前置詞 *en* に先立たれるときは、この自由を節度をもって使わないといけない」

Frei (1929) は、(12)、(13) のような例をあげ、(14) のように言っている。

- (12) L'âme collective ne peut être dirigée qu'**en la pénétrant**. (Frei 1929, rééd. 2011, p.144)

集団の精神は、それに入りこむことによってしか指導されえない。

- (13) La clarté est, **en écrivant**, une des formes de la probité. (*ad loc.*)  
明晰さは、書くときには、誠実さのひとつの形である。

- (14) « De telles phrases, est-il besoin de le dire, ne sont équivoques qu'à la réflexion ; leur rôle est de représenter des circonstancielles

qu'il serait trop long d'énoncer explicitement. » (*ad loc.*)

「こうした文は、いちいち考えることでしか曖昧にならないというべきだ。それらの文の機能は、明示的にのべるなら長くなりすぎる状況節を（簡潔に）示すことにある」

以上のように、規範主義が主語不一致ジェロンディフを許容する条件は、ほとんどつねに、「曖昧性が回避されるなら」ということである。しかし一般的に、規範主義は、曖昧性さえ回避できればどんな文でも許容するかといえ、そのようなことからほど遠いので、主語不一致ジェロンディフに関して「曖昧性回避」をもちだすのは、その場かぎりの説明にすぎない。

じつは、(15)の引用にみられるように、ジェロンディフの主語一致の規範が確立されたのは存外おそく、18世紀からであるという。それ以前はむしろ、主語一致・不一致に関してはより大きな自由があった。

- (15) « L'exigence d'un sujet identique pour la principale et le groupe surbordonné ne date que du XVIII<sup>e</sup> siècle. On usait auparavant d'une bien plus grande liberté : le sujet du groupe pouvait remplir une fonction quelconque dans la proposition principale (sujet, mais aussi, objet, circonstanciel, déterminatif...) ou même dans une autre proposition du contexte. [...] »<sup>5</sup>

*Mes crimes, en vivant, me la pourraient ôter.* (Corneille) »

(Chevalier *et alii*, 1988<sup>2</sup>, pp.126-127)

「主節と従属節のあいだの同一主語の要請は、18世紀からしかない。それ以前はより大きな自由があった。従属節の主語は、主節においてなんらかの機能（主語だけでなく、目的語、状況補語、限定語など）をはたしていればよかったし、さらには文脈上の別の節のものでもよかった。[...]」

「わたしの罪は、生涯にわたって（直訳：生きているあいだ）、彼女をわたしから奪いうる」（コルネイユ）」

以上でみてきたように、とかく厳格さをほこるフランス文法の規範のなかにあつて、ジェロンディフの主語一致の規則は、はじめからなにほどこ相対化されざるをえない部類であつたと思われる。

しかしその際、主語不一致ジェロンディフの生起は、どのような場合でも無

差別に見られるわけではなく、比較的主語不一致ジェロンディフが出現しやすい環境があることも事実である。本稿では、どのような条件のもとで主語不一致ジェロンディフが出現する傾向にあるかを考えてゆきたい。

### 3. 先行研究

主語不一致ジェロンディフに関する、規範文法や規範主義的著作による議論は、すでに前節でみてきたので、以下では、それ以外の先行研究について検討しておきたい。

#### 3.1. 談話レベルでの観察

Reichler-Béguelin (1995) の主張は、「[文] という、せまく、人工的に自律化させられた枠」(« cadre étroit et artificiellement autonomisé de la « phrase » », *ibidem*, §.5) にこだわらず、より広い談話レベルでの観察をすることで主語不一致ジェロンディフの理解が進む、というものである。

そのひとつの論拠として、(16) のような、ジェロンディフ句のみで書記的な一文が形成されているとき、主語を探索するには、必然的に、文レベルを超えた考え方をするしかないということがあげられている。

- (16) Michael Heseltine doit donc expier son crime. Comment ? **En lui bloquant** la route du 10 Downing street. Pour l'empêcher d'atteindre le seuil fatidique des 187 suffrages au second tour, une coalition (...) s'est montée. (*Journal de Genève*, les 24-25 novembre 1990, cité dans Reichler-Béguelin 1995, §.3)

マイケル・ヘーゼルタインは彼の罪を埋めあわせた。どのようにして？ダウニング街 10 番地への道を閉ざすことによって。彼が 187 票という運命的な関に達することをさまたげるため、連立が準備された。

主語不一致ジェロンディフについても、たとえば、(17) の文は、単独でみたときにはいかにも破格のように思えるが、(17') のように、前文脈をみるならば、解釈ははるかに容易になり、破格の印象はずっと薄れるという。

- (17) Par exemple, c'est **en coupant** très court les cheveux de Twiggy,

qui a de grandes oreilles, que son visage est devenu inoubliable.

(Reichler-Béguelin 1995, §.5)

たとえば、大きな耳をもつトゥイギーの髪をととてもみじかく切ることによって、彼女の顔が忘れられないものになる。

- (17') Parfois, au contraire, on s'appuie sur les défauts physiques d'une femme pour créer un personnage hors du commun. Par exemple, c'est **en coupant** très court les cheveux de Twiggy, qui a de grandes oreilles, que son visage est devenu inoubliable.

(*Marie Claire*, janvier 1994, cité dans Reichler-Béguelin, *ad loc.*)

ときには、逆に、尋常でない人物をつくりあげるために、身体的な欠陥をたよることもある。たとえば、大きな耳をもつトゥイギーの髪をととてもみじかく切ることによって、彼女の顔が忘れられないものになる。

すなわち、(17')では、前文の主語 *on* がジェロンディフの意味上の主語と同一指示になるので、文レヴェルを超えた関係づけを想定することにより、規範的なジェロンディフと連続的にとらえられるようになる、ということであろう。

このように、広い文脈を観察することは、主語の同定に役立つひとつの方法であることはまちがいないが、文脈上に主語（と同一指示の語）がありさえすれば主語不一致ジェロンディフが許容されるわけでもなく、それどころか、いくら文脈上を探索しても、言語的に明示された主語はどこにも見あたらない事例も少なくない。したがって、この談話的な接近法は、かぎられた場合にしか適用可能でない考え方であると思われる。

### 3.2. ジェロンディフの用法分類との対応関係

Halmøy (2003), ロドリゲス (2006) は、主語不一致ジェロンディフが、ジェロンディフのさまざまな用法のなかで、かぎられた部分にしか出現しないことを示している。

Halmøy (2003) によると、主語不一致ジェロンディフが出現しうるのは、つぎの4つの用法においてであるという。第1に、Halmøy のいう「文法化したジェロンディフ」(*gérondif grammaticalisé*)。これはいわゆる慣用表現のことであり、*en admettant*, *en partant (de)*, *en passant (par, devant)* などあげられている (*ibidem*, pp.115-116)。たとえば、(18) のような例文があげられている。第2に、文副詞としてはたらくジェロンディフ。思考動詞がジェロ

ンディフにおかれた場合が多く、思考動詞があらわす思考を行なう主体が暗黙の主語となる。たとえば、(19)のような例文があげられている。第3に、時間的位置 (repère temporel) をあらわすジェロンディフ。Halmøy は、時間的位置は統辞的な自由度が高いので、主語が不一致の場合もあると説く。(20)のような例文があげられている。第4に、Halmøy の分類でいう A 型、すなわち、時間+原因、過程、手段などをあらわす用法。(21)のような例文があげられている。

- (18) **En partant** de l'autoroute A1, prendre le périphérique au niveau de la porte de la Chapelle et allez jusqu'à la porte de Bercy. (*ibidem*, p.115) 高速道路 A1 を出て, シャペル門のところで周回道路にはいり、ベルシー門まで行ってください。
- (19) **En y pensant**, le concept même d'une ville tenait du délire. (*ibidem*, p.117) 考えてみると, 都市の概念自体が妄想をふくんでいる。
- (20) **En sortant** du restaurant, les trottoirs étaient noirs et luisants, parsemés de givre et de neige fondue. (*ibidem*, p.119)  
レストランを出ると, 歩道は黒く光っていて、霜と溶けた雪がちりばめられていた。
- (21) **En mettant** la lettre à la poste ce soir avant huit heures, elle arrivera demain. (*ibidem*, p.120)  
今夜 8 時までには郵便局から手紙を出せば, その手紙は明日にはつく。

一方、他の用法タイプのジェロンディフは、つねに主語が主節の主語と同一指示であるという。つぎの 3 つの類型がそれにあたる。第 1 に、Halmøy の分類でいう A' 型、すなわち、ジェロンディフ句の内容と主節の内容が包含関係にあるか、等置されている場合。下記の例文 (22) がこの型に該当する。第 2 に、Halmøy のいう B 型、すなわち、同時性や付帯状況をあらわすジェロンディフ。例文 (23) がこの型に該当する。第 3 に、Halmøy のいう B' 型、すなわち、下位概念性 (hyponymie) や様態をあらわすジェロンディフ。例文 (24) がこの型に該当する。

- (22) **En tuant** sa mère, **en étrangeant** le sordide, il a aussi assassiné le rêve. (*ibidem*, p.100)  
母親を殺し, あさましい男を殺すことで、かれは自分の夢も殺したのだ。

- (23) Je chante **en me rasant**. ⇐ Je me rase **en chantant**.

(*ibidem*, p.102)

わたしはひげをそりながら歌う。⇐わたしは歌いながらひげをそる。

- (24) Elle répondit **en bafouillant** que c'était la fille d'une ancienne voisine. (*ibidem*, p.104)

彼女は、あのひとはむかしの隣人の娘だと、くちごもりながら言った。

一方、ロドリゲス (2006) は、文副詞用法を中心的考察から除外したうえで、例 (25) のような「時間的基準点」、(26) のような「単なる同時性」、(27) のような「様態」、(28) のような「手段・方法」の 4 つの用法を認定している。「手段・方法」の類には、主節の叙法、時制などの要因によって、(29) のような「原因・契機」、(30) のような「条件」の解釈も加わるとする。

- (25) **En montant**, dans l'escalier noir, j'ai heurté le vieux Salamano, mon voisin de palier. (*L'Etranger*, p. 41, ロドリゲス 2006, p.106)

暗い階段をのぼるとき、わたしは踊り場をへだてて向かいに住んでいる年老いたサラマノとぶつかった。

- (26) J'ai fumé **en regardant** la mer. (*L'Etranger*, p.83, ロドリゲス 2006, p.111) わたしは海をながめながらたばこを吸った。

- (27) Je traverse la ville **en courant**. (*L'Etranger*, p.25, ロドリゲス 2006, p.112) わたしは走って町を横切った。

- (28) L'aubergiste, **en leur donnant** des coups de torchon, fit partir le vieillard et l'enfant. (*L'Evangile selon Pilate*, p. 26, ロドリゲス 2006, p.113) 旅籠の主人は、ぞうきんで払って、老人と子どもを立ち去らせた。

- (29) Puis je l'ai empêchée de parler **en l'embrassant** longuement.

(*L'Etranger*, p. 271, ロドリゲス, *ad loc.*)

わたしは彼女にながくキスすることで彼女が話すのをさまたげた。

- (30) On l'aurait bien étonné **en lui disant** qu'il finirait concierge à l'asile de Marengo. (*L'Etranger*, p. 13, ロドリゲス, *ad loc.*)

かれがマレンゴの養老院の管理人として一生を終えるだろうなどと言っていたなら、かれを仰天させたことだろう。

ロドリゲスによるこの分類は、「時間的基準点」については Halmøy による



同名の分類,「単なる同時性」は Halmøy のいう B 型,「様態」は B' 型,「手段・方法」は A 型におおむね対応するものと思われる (A' 型に相当する分類はロドリゲス (2006) ではたてられていない)。

そして, ロドリゲスは, 例文の観察にもとづき, これらの分類のうち, 「時間的基準点」, 「手段・方法」の用法のなかに, それぞれ, (31), (32) のような主語不一致の事例もありうるとしている。

- (31) Je l'avais pour ainsi dire oublié, mais **en me levant**, cette idée m'est venue. (*L'Etranger*, p.30, ロドリゲス 2006, p.109)

わたしは, いわば, そのことを忘れていたが, 起きるときに, その考えがわたしに来了。

- (32) **En postant** la lettre ce soir, elle arrivera demain. (*ibidem*, p.114)

この手紙を今夜出せば, 明日つくだろう。

理解のたすけになるので, ロドリゲス (2006) から, まとめの表 (33) を引用しておこう。ただし, 表のなかで, SG はジェロンディフ句をあらわしている。

(33) 表：ジェロンディフの各用法のまとめ (*ibidem*, p.115)

時間的基準点	単なる同時性	様態	手段・方法
解釈によって SG は主節の時間的状況を表す	解釈によって SG は主節の様態を表す		
別主体は可能	必然的に同一主体		別主体は可能
不完全共存 (解釈上継起関係可能)	完全共存 (解釈上継起関係不可能)		不完全共存 (解釈上継起関係可能)
SG と主節は意味・目的関係なし		SG と主節は意味・目的関係あり	
位置：殆ど主節の前 (後も可能)	位置：自由 (実例は殆ど主節後)	位置：主節の後	位置：自由

以上でみてきた Halmøy (2003), ロドリゲス (2006) の研究は, どの用法において主語不一致ジェロンディフが生起しうるかを示したという意味で, 記述的価値が高いが, 「時間的基準点」や, ロドリゲスの「手段・方法」, Halmøy の「A 型」といった用法のジェロンディフのなかでもどのような事例が主語不一致になっているのか, そして, 文副詞のような例もふくめて, 主語不一致が可能になる場合を説明できるような原理を示すことはできないのか, という疑

問がのこる。

### 3.3. 関係文法による理論的考察

Legendre (1989) は関係文法 (grammaire relationnelle) のわく組みに依拠して、ほかのさまざまな問題と同時に、主語不一致ジェロンディフの問題も扱っている。

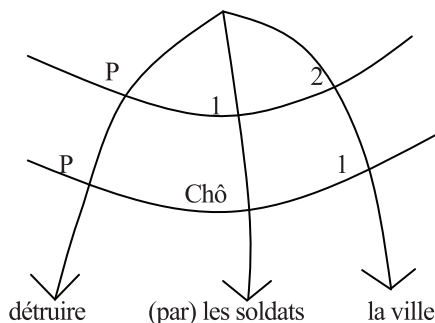
そこでは、主節が受動文の場合と経験者間接目的補語をもつ文の場合が議論の中心になっているので、前提的に、関係文法における受動文と経験者間接目的補語の扱いを確認しておこう。

関係文法では、文中における文法関係を、P (述語)、1 (主語)、2 (直接目的補語)、3 (間接目的補語) などの記号を用いて記述する。そして、これらの文法関係は、意味的に定まるとされる基底的なレベル (始発層) から、ときに複数のレベルを経て、表面的な言語表現にあらわれるレベル (最終層) にいたる派生により順次変化すると仮定される。(34) のような受動文の扱いは、(34') のような図によって示される。すなわち、始発層で直接目的補語 [2] であった *la ville* が最終層で主語 [1] に昇格し、そのことによって始発層で主語 [1] であった *les soldats* は役割を失い、関係文法独特の用語でいうところの「失業項」(*chômeur*, *chô* と略記される) になっている。関係文法は、「ひとつの層には、同じ文法関係をもつ名詞句は最大でもひとつしか存在してはならない」という「層内での単一性の原則」(*principe de l'unicité stratale*) を認めるため、最終層で主語 [1] をふたつ置くことはできないのである。

(34) *La ville a été détruite par les soldats.* (木内 2005, p.3)

その町は兵士らによって破壊された。

(34')



(ad loc., 一部改変)

この派生は、初期の生成文法で考えられていた能動文から受動文への変形に類するものであるといえる。実際、(34')の始発層における文法関係は、受動文(34)に対応する能動文(35)のものと同様である。

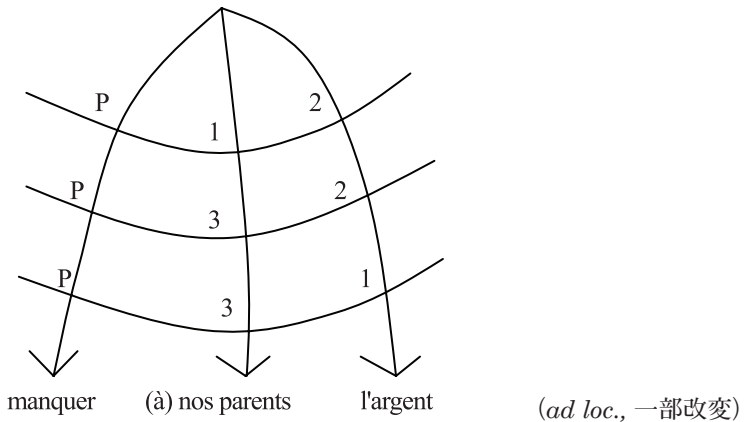
(35) Les soldats ont détruit la ville. 兵士たちがその町を壊した。

つぎに、経験者間接目的補語をもつ文について確認しよう。(36)の文は、関係文法においては、(36')のように扱われる。すなわち、始発層で主語 [1] であった経験者 *nos parents* が最終層で間接目的補語 [3] に、始発層で直接目的補語 [2] であった *l'argent* が最終層で主語 [1] になっている<sup>6</sup>。

(36) L'argent manque à nos parents. (Legendre 1989, p.756)

わたしたちの両親 (に) はお金が足りない。

(36')



さて、以上をふまえて主語不一致ジェロンディフの問題に移ると、Legendre (1989) はつぎのような定式化をしている。

### (37) Condition on possible controllers of *en* clauses

Only a nominal heading a 1-arc can control an *en* clauses.

(*ibidem*, p.779)

*en* 句の可能な統率語の条件：1の弧の先にある名詞句だけが、*en* 句を統率しうる。

ここでいう *en clauses* とはジェロンディフ句のことである。つまり、(いずれかの層で) 主語位置 (1-arc) を占める名詞句がジェロンディフ句を統率しう、ということである<sup>7</sup>。このような、ひろい意味での「主語」という条件を与えることによって、主語一致ジェロンディフはいうにおよばず、以下に例をみるような、受動文の動作主補語や、経験者をあらわす間接目的補語の名詞句がジェロンディフ句の意味上の主語と同一指示になるタイプの主語不一致ジェロンディフをも説明できるようになる、というのが Legendre の主張である。

受動文の例からみてゆこう。

- (38) Plusieurs terroristes ont été arrêtés **en essayant** de passer la frontière. (*ad loc.*) 何人ものテロリストが国境をこえようとして逮捕された。
- (39) De nouvelles victimes ont été découvertes **en creusant** dans le jardin. (*ad loc.*) 庭を掘っていると、あらたな犠牲者たちが発見された。
- (40) Les manifestants ont été dispersés par la police **en hurlant**. (*ad loc.*) デモ参加者たちは叫びながら警察によって追い散らされた。

(38)では、関係文法の受動文派生において最終層の主語 *plusieurs terroristes* がジェロンディフ *en essayant* を統率する。(39)では、始発層の主語で、受動態におかれることによって表現上は姿を消した失業項がジェロンディフ *en creusant* を統率する。(40)はふたとおりに曖昧で、ジェロンディフ *en hurlant* を統率するのは、最終層の主語 *les manifestants* か、または始発層の主語で最終層の失業項 *la police* でありうる。「ジェロンディフを統率するのは、いずれかの層で主語位置を占める項である」としておけば、以上のいずれの場合もカヴァーすることができる。

つぎに、経験者間接目的補語の例をみよう。

- (41) Cette idée m'est venue **en dormant**. (*ibidem*, p.780) その考えは、寝ているときにわたしに came。
- (42) De nouvelles responsabilités lui incomberont tout **en étant** de droit celles de son frère aîné. (*ad loc.*)  
法的にはかれの兄の責任であるにもかかわらず、あらたな責任が彼にふりかかっ

てくるだろう。

- (43) Sa femme lui manque tout **en l'ayant vu(e)** une heure plus tôt.

(*ad loc.*)

1時間前に会ったにもかかわらず, 彼は妻がいなくてさみしい。(直訳: 妻が彼に欠ける)

(41)では、ジェロンディフ *en dormant* を統率するのは、始発層の主語で、最終層の間接目的補語(経験者)の *m'* である。それに対して、(42)では、ジェロンディフ *en étant* を統率するのは、最終層の主語 *de nouvelles responsabilités* である。(43)では、ジェロンディフ *en ayant vu* を統率するのは、経験者の *lui* であっても、最終層の主語 *sa femme* であってもよい(したがって、過去分詞 *vu* の一致語尾として、男性形 *vu* と女性形 *vue* の両方がありうる)<sup>8</sup>。したがって、この場合についてもまた、「ジェロンディフを統率するのは、いずれかの層で主語位置を占める項である」としておけばよいことになる。

しかし、以上でみてきたような Legendre (1989) の説明に対しては、のちの研究で批判が出されている<sup>9</sup>。それについては次節で確認することとしよう。

### 3.4. 卓立 (*saillance*)・主題性 (*thématicité*) による説明

Haspelmath (1995), 木内 (1992) (1998) (2005) は, Legendre (1989) (1990) の考え方では主語不一致ジェロンディフを説明しきれないという批判をしたうえで、それぞれ代案を提起している。

Haspelmath (1995) による批判は、以下の3つの点にまとめることができる。

第1に、(44)のように、主節の直接目的補語がジェロンディフ句を統率することもあるが、直接目的補語は関係文法のどのレベルにおいても主語位置を占めない。

- (44) **En téléphonant** à certaines cliniques pour demander une consultation, on **me** conseille de m'adresser directement au chirurgien. (*ibidem*, p.32)

いくつかの診療所に診察をお願いするため電話したところ, 外科医に直接連絡するよう助言された(直訳: ひとわたし「を」助言した)。

第2に、(45)のように、主節の命題の参与項 (*participant*) ではなく、参与項の所有者がジェロンディフ句を統率することがあるが、Legendre の説ではこうした例を説明できない。

- (45) **En organisant** l'enquête..., **notre** but était de trouver un dénominateur commun... (*ibidem*, p.34)

調査を企画する際、われわれの目的は... に共通点を見いだすことである。

第3に、(46)のように、先立つ談話のなかで卓立した参与項 (*salient participant*, (46)の場合は前の文の主語である *il*) がジェロンディフ句を統率する場合もある。

- (46) Il pensa une seconde que c'était sans doute cela qui l'avait sauvé, lui, trois mois plus tôt, mais en même temps, il cherchait un moyen de lui prouver le contraire. **En y réfléchissant**, c'était elle qui dès le début de leur liaison avait pris toutes les initiatives.

(*ibidem*, p.35)

そのことが3か月まえに彼を救ったのだと彼は一瞬考えたが、同時に、逆のことを証明する手段をさがしていた。よくよく考えると、彼女こそが彼らの関係のはじめからすべての主導権をにぎっていたのだ。

以上3つの批判にもとづき、Haspelmath (1995) は、つぎのような仮説をたてている。

- (47) « *Since the control is by a highly salient participant when it is not by the subject participant, and since the subject is most often the most salient participant of a clause, the most economic statement would be simply that the implicit subject is controlled by the most salient participant.* » (*ibidem*, p.36)

「主語参与項以外によって統率がなされるとき、統率はすぐれて卓立した参与項によってなされることが、主語はもっとも多くの場合、節のもっとも卓立した参与項であることからして、もっとも経済的な言明は、単に、暗黙の主語がもっとも卓立した参与項によって統率されるということである」

しかしながら、「もっとも卓立した参与項」がジェロンディフ句を統率する、という仮説は、なにをもって「もっとも卓立した」といえるかが明確にならない限り、あまり意味をなさないように思われる。とりわけ、たとえばつぎの(48)の例のように、ジェロンディフ句の意味上の主語が文面上はどこにもあらわれていない場合、それがいかなる点で「もっとも卓立した参与項」といえるのか、それどころか、そもそも「卓立している」といえるかという疑問がのこる。

- (48) Les peintures étaient en grande partie détruites. Le tableau de gauche **en descendant** l'escalier n'existait plus [...] (L. Dimier, *Le Primatice, peintre, sculpteur et architecte des rois de France*, p.273)  
 絵画は大部分破壊されていた。階段をおりて左手の絵はもはやなくなっていた。 [...]

一方、木内(1992) (1998) (2005) も Legendre (1989) (1990) に批判をくわえている。木内 (2005) による批判のおもな部分は、以下の3点にまとめることができる。

第1に、経験者間接目的補語をとる心理動詞が、本当に(36')のような基底構造をもっているのであれば、なぜその構造が(50)のように表層で実現されることはほとんどないのか、という疑問がある。

- (49) Cette musique me plaît. (木内 2005, p.47) この音楽はわたしに気に入る。  
 (50) \* Je plais (à) cette musique. (*ad loc.*)

わたしはこの音楽を気に入る。[日本語では容認可能な文]

第2に、派生の過程で主語になる要素がいずれもジェロンディフ句を統率するのであれば、なぜ多くの場合に解釈がひとつに定まるのか、という問題がある。(51), (52)のように、文のあらわすできごとの因果関係などから定まる((51)では Paul が, (52)では me の形であらわれている話者がジェロンディフ句の主語)といえる場合もあるが, (53)のように、両義的になってもよさそうな文においても、一方の解釈 (Paul がジェロンディフ句の主語) しかゆるされない。

- (51) Paul m'a dégouté **en mangeant** salement. (*ad loc.*)  
 ポールはきたない食べ方をすることでわたしをうんざりさせる。
- (52) **En écoutant** ce qu'il me disait, Paul m'a dégouté. (*ad loc.*)  
 かれがわたしに言うことをきいていると, ポールはわたしをうんざりさせる。
- (53) Paul m'a dégouté **en écoutant** ses paroles. (*ad loc.*)  
 かれのことばをきいていると, ポールはわたしをうんざりさせる。

第3に、主節のなかにジェロンディフ句を統率する要素がない場合の説明ができないということである。こうした場合、ジェロンディフ句を統率する要素をさがすには、談話全体を問題にせざるを得ない。

- (54) **En entrant** dans l'église, le regard s'arrête sur un beau jubé de la Renaissance. (*ibidem*, p.48)  
 教会にはいると, ルネサンス期のうつくしい内陣高廊に視線がとまる。
- (55) **En approchant** d'Alexandrie, l'air s'allège. (*ad loc.*)  
 アレクサンドリアに近づくと, 空気が軽くなる。

木内(2005)はさらに、非人称構文の事例や、(心理動詞ではない)他動詞文の事例を検討している。後者に関しては、つぎの(56)のような典型的な他動詞文において、表層の主語が基底構造でも主語ではないとは考えられないとして、Legendre を批判している。

- (56) On m'a volé mon portefeuille **en allant** à l'école. (*ibidem*, p.51)  
 学校にいくとき, 財布をとられた。(直訳: ひとがわたしに財布をぬすんだ)

そして、(56)では主語が主題性の弱い on であることに着目し、「主語名詞句に強い脱主題化、そして同時に目的語名詞句の主題化が起こると、心理動詞の場合と同様に、目的語による副詞句のコントロールが可能になる」(*ibidem*, p.52) とのべている。心理動詞の場合も、目的語がジェロンディフ句を統率できるのは、たいてい(57)のように主語が無生物のときであり、(58)のように主語がひとをあらわすときは目的語寄りの解釈が困難であるとしている。

- (57) La maison lui a plu **en la visitant**. (*ad loc.*)



その家を訪ねたら，その家はかれに気に入った。

- (58) Pierre a plu à Marie **en écoutant** cette chanson. (*ad loc.*)

その歌を聴いていたら，ピエールはマリーに気に入った。(Marie が主語の解釈は不可能)

以上のようなことから，つぎのような規則を提案している。

- (59) 「ジェロンディフ等の副詞句のコントローラーとしてまず解釈されやすいのは主文主語である。ただし，そのように解釈されるためには，それが主題性の高い名詞句であることが必要となる。一方，主語名詞句の主題性が低い場合は，主題性の高い別の名詞句，またはその文が含まれる談話の主題そのものがコントローラーになる」

(*ibidem*, p.53)

以上のような木内(2005)の説についていうと，文レヴェルを超えて，談話を考慮しなければならないという点には賛同できるが，たとえばつぎの(60)のような例では，*en l'utilisant* を統率するのは，あえて言いかえるなら(60')のように代名詞 *on* で示されうるような，(発話者をその一員として含むとはいえ) だれもが該当しうる汎人称的な主体であり，かならずしも「主題性が高い」とはいえないのではなかろうか。

- (60) Mais le remonte-ski est un peu déséquilibré **en l'utilisant** seule.

(Annonce matrimonial cité dans Reichler-Béguelin 1995, §.3)

しかし，スキーのリフトはひとりで使うと少し不安定になります。(結婚相手募集の広告)

- (60') Mais le remonte-ski est un peu déséquilibré **si on l'utilise** seule.

しかし，スキーのリフトは，ひとがひとりで使うなら少し不安定になります。

以上で行なってきた先行研究の検討全体をうけて結論的にいうなら，各研究で出されている諸説にはそれぞれにもっともな点があるが，観察の範囲をさらにひろげてゆくと，それらの仮説が適用できない例があらわれる，という場合が多いように思われる。本稿では，なるべく新たな反例に足をすくわれることがないように，コーパス調査を実施し，多様な実例を収集したうえで，論を起

こしてゆきたい。

## 4. コーパス調査

### 4.1. 調査の対象と方法

以下では、パリ第5大学などの研究グループ「Lexique」によって編纂されたフランス語のコーパス、「Corpatext 1.02」(以下、Corpatext とよぶ)<sup>10</sup>を利用して、本稿筆者が、フランス語における主語不一致ジェロンディフの使用の実情を知るために行なった調査について報告する。

調査の方法は、以下にのべるとおりである。まず、フランス語において使用頻度が高いと思われる118の動詞<sup>11</sup>のジェロンディフ形を選定した。その一覧はつぎのとおりである。あとで分類に使用するため、動詞の事行類型 (types de procès), すなわち心理 / 認識動詞 (verbes psycho-cognitifs), 移動動詞 (verbes de déplacement), 知覚動詞 (verbes de perception), 行為動詞 (verbes d'action), 状態動詞 (verbes d'état) の別をあわせて示している。

#### (61) 調査対象のジェロンディフ

1. en achetant	行為	41. en entrant	移動	81. en rendant	行為
2. en admettant	心理 / 認識	42. en envoyant	行為	82. en rentrant	移動
3. en aidant	行為	43. en essayant	行為	83. en répondant	行為
4. en aimant	心理 / 認識	44. en étant	状態	84. en restant	状態
5. en allant	移動	45. en étudiant	心理 / 認識	85. en retournant	行為
6. en apercevant	心理 / 認識	46. en expliquant	行為	86. en retrouvant	行為
7. en apportant	行為	47. en faisant	行為	87. en revenant	移動
8. en apprenant	心理 / 認識	48. en fermant	行為	88. en riant	行為
9. en approchant	移動	49. en finissant	行為	89. en sachant	心理 / 認識
10. en arrêtant	行為	50. en gagnant	行為	90. en s'approchant	移動
11. en arrivant	移動	51. en gardant	行為	91. en se couchant	行為
12. en attendant	行為	52. en habitant	状態	92. en se demandant	心理 / 認識
13. en ayant	状態	53. en laissant	行為	93. en se disant	行為
14. en bougeant	移動	54. en lisant	行為	94. en se levant	行為
15. en buvant	行為	55. en mangeant	行為	95. en se promenant	移動
16. en cherchant	行為	56. en manquant	状態	96. en se rappelant	心理 / 認識
17. en choisissant	心理 / 認識	57. en marchant	移動	97. en se rapprochant	移動
18. en commençant	行為	58. en mettant	行為	98. en se rencontrant	行為

19. en comparant	心理 / 認識	59. en montant	移動	99. en se retrouvant	行為
20. en comprenant	心理 / 認識	60. en montrant	行為	100. en se trouvant	状態
21. en comptant	心理 / 認識	61. en observant	心理 / 認識	101. en sentant	知覚
22. en concevant	心理 / 認識	62. en oubliant	心理 / 認識	102. en songeant	心理 / 認識
23. en conduisant	行為	63. en ouvrant	行為	103. en sortant	移動
24. en connaissant	心理 / 認識	64. en parlant	行為	104. en suivant	行為
25. en considérant	心理 / 認識	65. en partant	移動	105. en supposant	心理 / 認識
26. en contemplant	知覚	66. en passant	移動	106. en tenant	状態
27. en continuant	行為	67. en payant	行為	107. en tirant	行為
28. en coupant	行為	68. en pensant	心理 / 認識	108. en tombant	移動
29. en courant	移動	69. en perdant	行為	109. en touchant	行為
30. en criant	行為	70. en portant	行為	110. en tournant	移動
31. en croyant	心理 / 認識	71. en poussant	行為	111. en travaillant	行為
32. en dansant	行為	72. en prenant	行為	112. en trouvant	行為
33. en demandant	行為	73. en quittant	行為	113. en venant	移動
34. en descendant	移動	74. en rappelant	行為	114. en vendant	行為
35. en devenant	行為	75. en rapprochant	行為	115. en vivant	状態
36. en disant	行為	76. en recevant	行為	116. en voulant	心理 / 認識
37. en dormant	行為	77. en reconnaissant	心理 / 認識	117. en voyageant	移動
38. en écoutant	知覚	78. en réfléchissant	心理 / 認識	118. en voyant	知覚
39. en écrivant	行為	79. en regardant	知覚		
40. en entendant	知覚	80. en rencontrant	行為		

つぎに、Corpatext の全体において、これらのジェロンディフの生起を網羅的に検索した。もちろん、en と現在分詞のあいだに接辞代名詞が割りこんでいるものもとあげている。ただし、代名動詞については、上記(61)の90. ～100. に掲載している語彙のみを調査するものとし、再帰代名詞をとりのぞいた元の動詞の例としては扱わないことにする。また、複合形(完了形)のジェロンディフは、また別に論ずるべき特異性があるので、今回の調査の対象にはしていない。したがって、13. en ayant, 44. en étant は、いずれも本動詞としての用例だけを調査対象としている。

そして、すべての生起に目を通し、主語の一致 / 不一致、ジェロンディフの位置(前置 / 挿入 / 後置 / 独立)によって、手作業で分類し、不一致の例をすべてデータとして蓄積していった。また、一致の例も本稿が関心をいどく点がふくまれているものは保存し、活用することとした。分類の基準はつぎに示す

とおりである。

「一致 / 不一致」とは、ジェロンディフ句がかかってゆく支配節の主語と、ジェロンディフ句の意味上の主語が同一指示か否かの別である。当該の節が *c'est ... qui / que ...* 分裂文になっているときは、*ce* を主語とみなさず、*c'est... qui / que* をとりはらって判断した。ジェロンディフ句が非人称文にかかっているときは「不一致」とした（ただし、ジェロンディフ句が非人称文のなかでも、非人称動詞がしがえる不定法にかかっている場合は、定型動詞をもたない節にかかるという意味で下記の「独立」にふくめた。また、「*Il pleut en faisant du soleil*」のように、非人称動詞がジェロンディフにおかれ、しかもそれが非人称構文にかかることも不可能ではないが、今回の調査範囲にはそのような例は見あたらなかった）。ジェロンディフが擬似分裂文 *ce qui / que ..., (c')est ...* にかかっているときも、つぎの(62)のように、厳密に形式的先行詞 *ce* にかかっていると見なせるごく少数の例外、ならびに(63)のように、擬似分裂文中の非定型動詞（この例では不定法 *faire*）にかかっている少数の場合をのぞいて「不一致」とした（擬似分裂文で多い「不一致」の例は、(64)のように *ce qui / que* ではじまる関係節の主語にかかるものである）。

- (62) *Ce que Bergotte me dit au sujet de Cottard me frappa, tout en étant contraire à tout ce que je croyais.*

(Proust, *À l'ombre des jeunes filles en fleurs*, CT<sup>12</sup>)

ベルゴットがわたしに言ったことは、わたしが思っていたすべてのことと逆でありながらも、わたしを感動させた。

- (63) *Mais je respecte la cause et, ce que je crains, c'est de lui faire tort en me laissant proclamer son représentant.*

(George Sand, *Lélia*, CT)

しかし、わたしは訴訟を尊重します。そして、わたしがおそれていることは、彼の代理人であるとされることによって、彼を罪におとし入れてしまうことです。

- (64) *Ce qui le frappa en entrant ce fut la propreté des murs et du carrelage.* (Anatole France, *L'Aventure de Crainquebille*, CT)

なかに入って、かれをおどろかせたものは、壁とタイル敷きの清潔さであった。

「前置 / 挿入 / 後置」とは、ジェロンディフ句にかかる節からみて、ジェロンディフ句が前にあるか、途中にあるか、後ろにあるかの別である。ただし、接

続詞、状況補語、遊離要素など、必須の文要素と見なせないものだけがジェロンディフ句より前にあるときは「前置」、後ろにあるときは「後置」とし、いずれも「挿入」とはしなかった。

「独立」とは、ジェロンディフ句のみで書記上の一文をなしているもの、またはジェロンディフ句が非動詞文（定型動詞をふくまない文）にかかるものをさす。Voici, voilà を主要部とする文も非動詞文とみなした。ト書きで人名のみにかかるものも「独立」とした。ジェロンディフ句が命令法にかかっているときは、命令法も定型動詞の一種なので「独立」とはせず、「前置/挿入/後置」に分類した。

「独立」の場合の「一致/不一致」は、非動詞文で名詞句（または代名詞）があらわれているときはその名詞句（または代名詞）との比較、それ以外の場合は、直前の文または節の主語との比較により判断した。ただし、ジェロンディフが非定型動詞にかかり、非定型動詞の意味上の主語が文脈上にも見あたらないときは、暗黙の主語が共通と考えられるかどうかで一致/不一致を判断した。

#### 4.2. 調査の結果

以下では、上記のような方法で行なった調査の結果を提示する。まず、全体の計数結果を表にしたものを(65)に示す。

(65) 表：Corpatext における各種ジェロンディフの生起数

調査対象形式	不一致ジェロンディフ					一致ジェロンディフ					総計
	前置	挿入	後置	独立	計	前置	挿入	後置	独立	計	
1. en achetant	0	1	1	0	2	5	5	33	1	44	46
2. en admettant	77	19	18	2	116	12	2	13	0	27	143
3. en aidant	0	0	1	0	1	7	5	18	3	33	34
4. en aimant	1	0	2	0	3	22	7	61	2	92	95
5. en allant	3	3	9	1	16	87	25	197	27	336	352
6. en apercevant	7	0	15	0	22	73	29	206	11	319	341
7. en apportant	0	1	4	0	5	8	9	31	0	48	53
8. en apprenant	3	1	20	0	24	60	18	160	8	246	270
9. en approchant	19	1	12	3	35	83	9	28	0	120	155
10. en arrêtant	0	1	1	0	2	9	2	50	2	63	65
11. en arrivant	37	6	12	2	57	315	106	171	3	595	652

12. en attendant	97	6	46	4	153	664	87	706	49	1506	1659
13. en ayant	0	3	3	2	8	19	13	156	3	191	199
14. en bougeant	0	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1
15. en buvant	1	1	3	1	6	21	8	95	0	124	130
16. en cherchant	2	0	8	1	11	59	16	161	14	250	261
17. en choisissant	0	0	1	0	1	7	6	35	2	50	51
18. en commençant	2	8	4	1	15	19	17	134	5	175	190
19. en comparant	1	0	8	0	9	37	7	54	2	100	109
20. en comprenant	1	0	0	0	1	2	0	30	2	34	35
21. en comptant	9	8	14	3	34	8	7	80	3	98	132
22. en concevant	0	0	0	0	0	3	2	3	0	8	8
23. en conduisant	0	0	0	0	0	11	3	37	0	51	51
24. en connaissant	5	0	2	0	7	14	4	10	0	28	35
25. en considérant	13	3	6	1	23	38	7	59	2	106	129
26. en contemplant	3	1	5	0	9	27	13	70	5	115	124
27. en continuant	6	0	0	0	6	30	15	142	8	195	201
28. en coupant	1	0	3	0	4	18	4	30	3	55	59
29. en courant	1	0	1	0	2	20	52	409	23	504	506
30. en criant	0	0	3	0	3	10	4	503	6	523	526
31. en croyant	0	1	0	2	3	21	1	109	3	134	137
32. en dansant	0	0	0	0	0	7	15	81	3	106	106
33. en demandant	3	0	3	0	6	24	6	227	7	264	270
34. en descendant	6	2	0	0	8	98	21	112	9	240	248
35. en devenant	0	0	0	0	0	27	8	72	6	113	113
36. en disant	6	0	4	0	10	315	25	2231	24	2595	2605
37. en dormant	7	1	5	0	13	9	12	63	5	89	102
38. en écoutant	8	3	9	0	20	61	16	170	8	255	275
39. en écrivant	11	4	4	1	20	32	18	116	12	178	198
40. en entendant	8	1	13	0	22	167	26	187	10	390	412
41. en entrant	12	16	17	5	50	232	118	319	22	691	741
42. en envoyant	0	0	1	0	1	15	7	95	5	122	123
43. en essayant	0	0	5	0	5	25	8	138	5	176	181
44. en étant	0	0	0	0	0	14	13	63	3	93	93
45. en étudiant	5	0	2	0	7	21	7	34	6	68	75
46. en expliquant	1	0	2	0	3	2	4	59	4	69	72
47. en faisant	12	2	21	1	36	227	146	1709	68	2150	2186
48. en fermant	1	1	0	0	2	11	9	116	1	137	139

49. en finissant	2	0	0	0	2	13	16	35	2	66	68
50. en gagnant	0	0	0	0	0	6	0	22	19	47	47
51. en gardant	0	0	0	0	0	13	9	81	3	106	106
52. en habitant	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	1
53. en laissant	5	0	0	0	5	49	17	493	18	577	582
54. en lisant	13	4	9	2	28	113	44	183	17	357	385
55. en mangeant	2	0	4	0	6	29	9	77	9	124	130
56. en manquant	1	0	0	0	1	0	1	7	0	8	9
57. en marchant	4	2	1	0	7	98	61	243	21	423	430
58. en mettant	10	2	7	1	20	71	29	339	24	463	483
59. en montant	5	0	3	1	9	50	25	112	11	198	207
60. en montrant	0	0	0	0	0	21	28	624	24	697	697
61. en observant	2	0	2	0	4	25	9	69	9	112	116
62. en oubliant	0	0	0	0	0	1	1	25	5	32	32
63. en ouvrant	3	5	1	0	9	63	19	168	7	257	266
64. en parlant	24	6	9	1	40	391	113	512	56	1072	1112
65. en partant	8	1	1	0	10	111	42	93	10	256	266
66. en passant	23	3	51	4	81	333	459	590	112	1494	1575
67. en payant	1	0	4	0	5	10	10	247	2	269	274
68. en pensant	10	0	10	0	20	42	7	324	12	385	405
69. en perdant	0	0	3	0	3	36	14	59	2	111	114
70. en portant	0	0	0	0	0	17	14	128	5	164	164
71. en poussant	0	0	0	0	0	21	12	368	19	420	420
72. en prenant	7	2	6	1	16	111	60	636	42	849	865
73. en quittant	2	2	4	0	8	153	57	162	7	379	387
74. en rappelant	0	1	0	0	1	8	10	55	1	74	75
75. en rapprochant	3	2	0	0	5	9	6	20	0	35	40
76. en recevant	4	3	3	0	10	46	28	93	5	172	182
77. en reconnaissant	0	0	8	0	8	28	18	124	6	176	184
78. en réfléchissant	7	2	1	0	10	41	11	34	0	86	96
79. en regardant	14	7	11	0	32	167	74	1064	24	1329	1361
80. en rencontrant	1	0	2	0	3	5	5	27	1	38	41
81. en rendant	1	0	1	0	2	55	22	169	14	260	262
82. en rentrant	4	3	2	0	9	193	59	125	3	380	389
83. en répondant	2	0	0	1	3	14	5	84	5	108	111
84. en restant	2	0	2	0	4	33	10	95	9	147	151
85. en retournant	1	2	0	0	3	27	9	49	5	90	93

86. en retrouvant	1	1	2	0	4	10	6	49	1	66	70
87. en revenant	5	2	3	1	11	154	30	175	29	388	399
88. en riant	1	0	2	1	4	37	185	916	64	1202	1206
89. en sachant	0	0	2	1	3	9	0	41	9	59	62
90. en s'approchant	5	0	3	0	8	37	7	81	2	127	135
91. en se couchant	3	0	0	0	3	17	8	28	1	54	57
92. en se demandant	0	0	0	0	0	2	2	37	1	42	42
93. en se disant	0	0	1	0	1	11	0	108	1	120	121
94. en se levant	3	0	0	0	3	40	17	237	9	303	306
95. en se promenant	1	0	1	0	2	58	15	56	3	132	134
96. en se rappelant	0	1	0	0	1	27	7	41	0	75	76
97. en se rapprochant	0	0	0	0	0	11	5	39	2	57	57
98. en se rencontrant	0	0	0	0	0	1	3	6	2	12	12
99. en se retrouvant	3	1	0	0	4	3	4	12	1	20	24
100. en se trouvant	0	0	1	0	1	11	0	25	4	40	41
101. en sentant	0	0	1	0	1	15	3	65	5	88	89
102. en songeant	4	0	9	1	14	56	19	226	7	308	322
103. en sortant	12	4	5	2	23	273	77	302	35	687	710
104. en suivant	4	0	5	3	12	106	36	250	29	421	433
105. en supposant	78	13	21	4	116	52	12	68	23	155	271
106. en tenant	10	3	8	0	21	24	13	176	17	230	251
107. en tirant	2	0	0	0	2	15	19	198	12	244	246
108. en tombant	0	0	0	0	0	35	34	135	1	205	205
109. en touchant	2	2	1	0	5	14	23	92	3	132	137
110. en tournant	2	0	0	0	2	44	26	160	3	233	235
111. en travaillant	1	0	0	0	1	26	15	66	7	114	115
112. en trouvant	1	0	3	0	4	12	10	73	1	96	100
113. en venant	1	2	4	2	9	48	26	134	8	216	225
114. en vendant	0	0	1	0	1	11	8	52	4	75	76
115. en vivant	0	0	1	0	1	12	11	42	5	70	71
116. en voulant	2	0	2	0	4	61	16	118	10	205	209
117. en voyageant	1	0	0	0	1	8	4	7	2	21	22
118. en voyant	23	13	34	4	74	481	223	1359	64	2127	2201
総 計	695	184	543	60	1482	7120	3119	22494	1259	33992	35474

この表は、主語不一致ジェロンディフのみならず、主語一致ジェロンディフについても、その使用実態の全体的傾向を知るうえで貴重なものになると思われる



れるが、今回は全般について考察するだけの余裕はないので、以下では、主語不一致ジェロンディフに関係する範囲でのみ、上記の表から観察できること、およびそのデータ収集時に目立った点を記してゆくことにしよう。

まず、ほとんどすべての動詞で、主語不一致ジェロンディフは、主語一致ジェロンディフより少ない生起しかなく、全体としても不一致は 35474 例中 1482 例(4.2%)しかなかった。その意味では、主語一致の規範的規則は、傾向のうえではある程度の有効性があるといえよう。しかしながら、en admettant だけでは、主語不一致ジェロンディフの生起が例外的に主語一致ジェロンディフの生起を上まわっており、ジェロンディフの成句的凝結 (figement) が進んでいることがうかがえる。しかしもちろん、(65)の表を全体にわたって見わたすと、各動詞の全生起のなかでは少数であっても、たいへん多くの動詞に主語不一致ジェロンディフがちらばって存在しているので、固定表現という説明だけでは主語不一致ジェロンディフのごく一部しか明らかにすることはできず、他の要因を考えるべきであることがわかる。

ここで、en admettant と同様に「熟語化」しているとみなされているいくつかのジェロンディフ、たとえば en attendant の主語一致用法・不一致用法の生起数の比率が、他の動詞と同様の傾向にとどまっており、主語不一致の事例が奇妙なほど少なくみえるかもしれないことに言及しておきたい。実は、主語一致・不一致の判断全般にかかわる困難が存在することをここで認めておかなければならない。典型的に人間が主体となる事行をあらわす動詞がジェロンディフにおかれていても、かならずしも無生物主語をもつ主節を「不一致」とはみなせない場合が少なくなかった。こうした事例については、あらたな基準をたてるなら、ちがった形で分類を再配分できるのかもしれないが、これまでのところ、ほかに適切な基準を見いだすにはいたっていない。例(66)にみられるように、擬人法という修辞法が存在することはもちろんであるが、

- (66) Dès l'origine, à tâtons, la vie, **en cherchant** la force, semblait confusément **rêver** la future création d'un axe central qui ferait l'être un, et décuplerait la vigueur du mouvement.

(Jules Michelet, *La mer*, CT)

当初から、手さぐりで、生命は力をさがしながら、存在をひとつにまとめ、動きの活性を増大する中心軸が将来に創造されることを、混乱しながら夢みているようである。

それ以前に、フランス語は、大橋ほか（1993, p.3）が、下記の（67）にみるような例を引きながらみとめているように、ある述語がひとをあらわす名詞を主語とするか、ものをあらわす名詞を主語とするかという選択制限（restriction sélective）が元来たいへんゆるやかな言語である、ということをおさえておかなければならない<sup>13</sup>。

（67）表：フランス語における選択制限の解除

（大橋ほか 1993, p.3 をもとに表を作成）

日本語		フランス語	
ひと・動物に関して	ものに関して	ひと・動物に関して	ものに関して
年よりだ	古い	il est vieux	
歩けない	動かない	il ne marche pas	
死んだ	こわれた	il est mort	

以上のようなことをふまえて考えると、（68）にみられる en attendant に関しても、

（68）Seulement, aux trente-sept étoiles représentant les trente-sept états de l'union qui resplendissent sur le yacht des pavillons américains, le marin en avait ajouté une trente-huitième, l'étoile de « l'état de Lincoln », car il considérait son île comme déjà rattachée à la grande république. « Et, disait-il, elle l'est de coeur, si elle ne l'est pas encore de fait ! » **En attendant**, ce pavillon fut arboré à la fenêtre centrale de granite-house, et les colons le saluèrent de trois hurrahs. (Jules Verne, *L'île mystérieuse*, CT)

待つあいだ（さしあたり）、このあずまやは、花崗岩でできた真ん中の窓のところに装飾がほどこされ、入植者たちは3度の歓呼で賞讃した。

主節の形式的な主語 ce pavillon も、人間と同様に、「待っている」という解釈も排除できないの<sup>14</sup>で、このような両義性が少しでもみとめられる場合は「不一致」の分類には入れず、さまざまな文脈的要因から、「一致」の解釈の可能性が排除できる事例のみを「不一致」に分類した<sup>15</sup>。このため、分類の観点に

よっては、「不一致」とされる例が本稿の調査より多くなる可能性があるが、本稿では、両義性を排除でき、確実に不一致とみなすことのできる例を扱うという方針によることにした。

渡邊(2011 b)でものべたように、ジェロンディフは状態動詞では（主語一致・不一致のいずれの場合でも）使用にかなりの制約があるが、そのことが数字のうえでも確認された。このうち、*en ayant* は総計 199 例、*en étant* は総計 93 例と、いずれも、動詞としての使用頻度の高さからすると、ジェロンディフとして用いられる頻度は極端に低い<sup>16</sup>。そのうち、*avoir* については、単純形は裸現在分詞が圧倒的なので、この調査では対象にならない。ジェロンディフは、*en ayant soin / l'air / conscience / égard* などの成句的なものがほとんどで、基本的に主語一致の様態用法であった（ただし、*en ayant égard* はこのかぎりではない）。また、*être* についてはさらに用法がかぎられており、総計 93 例中、さきに見た(62)のように、譲歩的にもちいられる *tout en étant* が 57 例を占めている<sup>17</sup>。また、*en étant* で主語不一致は皆無であった。

それとは逆に、ジェロンディフでとりわけ使われやすい動詞も存在する。たとえば、*en disant* は 2605 例と突出して多い。*En disant* は、*en attendant*（こちらも 1659 例と多いが）のような場合とちがって、熟語的というわけではないが、主語一致で後置のものが 2231 例（一致、不一致をあわせた全体のうち、じつに 85.6% を占める）とたいへん多く、それらはいずれも様態や付帯状況をあらわすジェロンディフであるという顕著な用法のかたよりがあることをも考慮すると、ある種の固定化（ステレオタイプ化）が起きているとも言えるかもしれない。こうした問題については、動詞ごとに事情がことなるとも考えられるので、とくに文法化のすすんだジェロンディフについては、稿をあらためて論ずることとしたい。

ジェロンディフの文中における位置に関していうと、もっとも目立っていることは、一致用法では後置ジェロンディフが 66.2% (33992例中22494例) を占め最多であるが、不一致用法では後置が 36.6% (1482例中543例) まで激減し、46.9% (695例) を占める前置ジェロンディフに首位をゆずる、ということである。この差については、例文を分類してきた経験からいうと、かならずしも不一致用法に積極的な理由は見いだしがたく、むしろ一致用法でとくに多い後置ジェロンディフの典型的な事例が、*parler en bafouillant*, *venir en courant* にみられるように、直前の動詞にかかって様態をあらわす事例であることにもとめるべきであると思われる。3.2 節でみたように、様態をあらわす後置ジェロ

ンディフは、基本的に主語一致用法であるため、不一致用法になるとこの類型の例がほとんど全面的に欠落するからである。

#### 4.3. ジェロンディフにおかれた動詞の事行類型

この節では、詳細な分析の手はじめとして、(61)で示した動詞の事行類型（心理 / 認識動詞、移動動詞、知覚動詞、行為動詞、状態動詞）ごとに(65)の統計を再集計し、それぞれの類型ごとの傾向を確認しておきたい。再集計の結果は、つぎの(69)の表のようになった。

(69) 表：動詞事行の類型別にみた不一致・一致ジェロンディフの生起数および割合

動詞事行の類型	不一致ジェロンディフ					一致ジェロンディフ					総計
	前置	挿入	後置	独立	計	前置	挿入	後置	独立	計	
心理 / 認識動詞	225	48	143	14	430	662	199	1961	123	2945	3375
移動動詞	149	46	125	21	341	2288	1201	3488	326	7303	7644
知覚動詞	56	25	73	4	158	918	355	2915	116	4304	4462
行為動詞	252	59	187	19	517	3139	1303	13565	653	18660	19177
状態動詞	13	6	15	2	36	113	61	565	41	780	816
総 計	695	184	543	60	1482	7120	3119	22494	1259	33992	35474

動詞事行の類型	動詞の数	1動詞あたり 不一致生起	1動詞あたり 一致生起	1動詞あたり 総生起	不一致生起率
心理 / 認識動詞	24	17.9	122.7	140.6	12.7%
移動動詞	21	16.2	347.8	364.0	4.5%
知覚動詞	6	26.3	717.3	743.7	3.5%
行為動詞	59	8.8	316.3	325.0	2.7%
状態動詞	8	4.5	97.5	102.0	4.4%
総 計	118	12.6	288.1	300.6	4.2%

まず、全体的な傾向としてもっとも注目されることは、心理 / 認知動詞では不一致生起率が 12.7%と（全体の不一致生起率である 4.2%にくらべても）突出して多いということである。このことは、好まれやすい意味的なわく組みがあることをうかがわせる。なお、この再集計の際の動詞の分類は、ひとつの動詞には語彙的に典型的なひとつの類型を割りふって機械的に計数したため、実際の類型からは若干ずれがあることをことわっておかなければならない。し

かしながら、たとえば *prendre* のような具象的な行為動詞や、*tenir* のような状態動詞を、隠喩表現 (*prendre qqch. pour qqch.* など) や熟語 (*prendre conscience*, *tenir compte* など) で心理 / 認知動詞に転用することはあっても、逆はないので、再分類作業を詳細化しても、心理 / 認知動詞へのかたよりがいっそう強まることはあっても、弱まることはないと思われる。

以下では、ジェロンディフにおかれる動詞の意味類型別に、それぞれの特徴を確認してゆきたい。

#### 4.3.1. 心理 / 認知動詞 (verbes psycho-cognitifs)

前節でのべたように、このカテゴリーに属する動詞において、主語不一致ジェロンディフの生起率をもっとも高い。

心理 / 認知動詞のなかでの内訳をみてゆくと、積極的な精神活動をあらわす動詞、すなわち動作主性 (agentivité) や意図性 (intentionnalité) の高い動詞で不一致生起が多い傾向があることがわかる。たとえば、*en admettant*, *en supposant* (いずれも不一致 116 例) は、「假定」という高度な言語行為をあらわすという点で意図性が高い。以下、多い順に *en comptant* (34 例), *en apprenant* (24 例), *en considérant* (23 例), *en pensant* (20 例) などがつづく。

逆に、*en sachant* (不一致 3 例), *en croyant* (不一致 3 例) などの状態的なものや、*en oubliant* (不一致例なし) のように非随意的なものは不一致例が少ない。

以下、動詞ごとにいくつか例をあげておく。動詞によってことなる特徴と、動詞にかかわらず共通してみとめられるところを確認できるよう、全体としては多数の例をあげることになる。

- (70) Que de larmes me viennent **en pensant** à vous, à votre petite Marie, à sa mère qui m'a aimée ! (Eugénie de Guérin, *Lettres*, CT)  
 あなたのこと、あなたのマリーちゃんのこと、そして、わたしを愛してくださったあなたの母上のことを考えると、なんと多くの涙がわたしにやってくるのか！
- (71) Et mon coeur se fondait en délices **en pensant** aux voluptés que donnerait ce baiser. (Gustave Flaubert, *Mémoires d'un fou*, CT)  
 そのくちづけがあたえるであろう逸楽を思うと、わたしのところは至上のよろこびにとろけてしまうのでした。
- (72) Or, **en pensant** que son hôte était prêtre, il vint à l'esprit de la coquette que ce serait un joyeux souvenir pour sa vieillesse, au

milieu de tant de souvenirs joyeux qu'elle avait déjà, que celui d'avoir damné un abbé. (Alexandre Dumas, *Vingt ans après*, CT) ところで、彼女をむかえ入れた男が司祭であったことを思うと、神父を墮落させてやったことが、すでに彼女がもっている多くの楽しい思い出とともに、老いてからの楽しい思い出になるかもしれないと、嬌女の頭のなかに浮かんできた。[支配節は非人称構文]

- (73) J'ai un malheur qui, **en y réfléchissant**, me disqualifie entièrement pour le métier de voyageur, écrivant un journal.

(Stendhal, *Mémoires d'un touriste*, CT)

わたしは不幸だった。その不幸は、考えてみれば、日記を書きつつ旅をするというしごとの資格を、わたしから完全に奪うものであった。

- (74) Malgré tout, **en y réfléchissant**, ces lettres passionnées ne répondaient nullement au physique de cette femme, car nulle n'était plus maîtresse des simagrées et plus calme.

(Joris-Karl Huysmans, *Là-bas*, CT)

それでも、考えてみれば、これらの情熱に満ちた手紙はその女の特徴にまったく見あわないものだった。というのも、どの女も彼女ほどは茶番を身につけておらず、彼女ほどはおだやかではなかったからである。

- (75) Sur le moment, je n'y ai prêté aucune attention, mais **en y réfléchissant**, c'est inhabituel. (Pierre-Jean Bascuñan, *Demain*, CT) そのときには、わたしはまったく注意をはらわなかったが、考えてみれば、尋常ではなかった。

- (76) **En considérant** bien, dit-il, ce qui vient de se passer entre la Floride et le Texas, il est évident que les mêmes difficultés se reproduiront entre les villes de l'état favorisé.

(Jules Verne, *De la Terre à la Lune*, CT)

フロリダとテキサスのあいだで起きたことをよく考えてみれば—と彼は言った—めぐまれた状態の都市のあいだでは、おなじ困難が起きることは明らかだ。

- (77) **En le considérant**, une foule de pensées vagues l'absorbait.

(Gustave Flaubert, *Salammbô*, CT)

そのことを考えたら、漠然とした多くの考えが彼をとらえるのだった。

- (78) **En considérant** les circonstances telles qu'elles ont été, ce mélange serait trop déraisonnable.

(Jean-Jacques Ampère, *Correspondance*, CT)

ありのままに状況を考えると, その混淆はあまりに不条理であった。

- (79) **En comptant** tous les mâles depuis l'âge d'un mois et au-dessus, il y en eut huit mille six cents, qui furent chargés des soins du sanctuaire. (Nombres, chapitre 3, section 22, CT)

一か月以上の男子の数は合わせて8600人で、聖所の務を守る者たちであった。(旧約聖書、民数記)

- (80) Lorsque, au repas du soir, cette descendance se trouvait réunie, ils étaient, **en les comptant**, sa femme et lui, trente et un à table. (Emile Zola, *L'Argent*, CT)

夕食で、この家系の子孫が集まったとき、夫妻をふくめて数えると, 31人がテーブルについていた。

- (81) Au milieu de ces appartements immenses, la famille composée de cinq personnes, **en comptant** les deux vieilles domestiques, semblait perdue. (Émile ZOLA, *Naïs*, CT)<sup>18</sup>

それらの大きなアパートマンのなかで、2人の年老いた女使用人をふくめて5人からなる家族が途方にくれたようだった。

- (82) Mais enfin, **en supposant** que toutes les difficultés soient résolues, tous les obstacles aplanis, en réunissant toutes les chances en votre faveur, **en admettant** que vous arriviez sain et sauf dans la Lune, comment reviendrez-vous ?

(Jules Verne, *De la Terre à la Lune*, CT)

しかし結局、すべての困難が解決し、すべての障害が克服されたとして, あなたに有利なあらゆる好機をとりそろえて、あなたが無事に月まで行けたと仮定しても、どうやって帰ってくるのですか？

- (83) **En admettant** que cette femme fût celle que vous avez connue il y a quarante ans, vous l'aimeriez encore ?

(Ponson du Terrail, *La femme immortelle*, CT)

あの女があなたが40年前に知り合った女だとして, あなたは彼女をまだ愛しているでしょうか。

- (84) **En admettant**, ce qui ne sera pas, que les villes commerçantes de la Virginie, des deux Carolines, de la Georgie, de l'Alabama, du Mississippi vinssent à tomber en leur pouvoir, après ?

(Jules Verne, *Les forceurs de blocus*, CT)<sup>19</sup>

ヴァージニア, 南北カロライナ, ジョージア, アラバマ, ミシシッピの商業都市がかれらの権力に落ちるものと—そんなことはないだろうが—仮定しても, そのあとは?

- (85) Tout le monde jugera qu'une pareille distribution initiale est extrêmement improbable (et, même **en la supposant** réalisée, la distribution ne serait pas uniforme à l'époque actuelle, par exemple le 1<sup>er</sup> janvier 1900, mais elle le redeviendrait quelques années plus tard). (Henri Poincaré, *Science et Hypothèse*, CT)<sup>20</sup>

だれもがそのような分布はきわめて蓋然性が低いと判断するであろう (そして, たとえ実現したと想定しても, その分布は現在とは, たとえば1990年1月1日とは, 同じではなからう。そうではなく, 数年経ったあとにまた同じになるのである)。

- (86) Mais d'abord, **en supposant** que le jeune comte n'ait pas eu le droit de tirer sur du Croisier, il n'y aurait pas imitation de signature. (H. de Balzac, *Le cabinet des antiques*, CT)

しかしまず, 若い伯爵にデュ・クロワジエをねらい撃ちする権利がなかったと仮定しても, 署名の模倣はなかったはずだ。

- (87) M. Leconte de Lisle est la première et l'unique exception que j'ai rencontrée. **En supposant** qu'on en puisse trouver d'autres, il restera, à coup sûr, la plus étonnante et la plus vigoureuse.

(Baudelaire, *Curiosités esthétiques*, CT)

ルコント・ド・リール氏は, わたしが出あった最初で最後の例外だ。たとえばかに見つけることができるとしても, リール氏は, まちがいなく, もっともおどろくべき, そしてもっとも強烈な例外でありつづけるだろう。

#### 4.3.2. 移動動詞 (verbes de déplacement)

移動動詞の主語不一致ジェロンディフの実例をみていると, ジェロンディフ句が, 具象的な移動ではなく, 仮構的移動 (déplacement fictif), ないし仮構的走査 (parcours fictif) を示す文が多いことに気づく。これらは脳裡でなされる精神活動であり, 前節でみた心理/認知動詞に近い。支配節は総称的 (générique) または無時間的 (atemporel) な内容が多い。以下の例でいうと, (88)~(90), (92), (93), (95)~(99)がこれにあたる。なお, (93)は, 時代



を「くだる」という仮構的走査である。

一方、具象的な移動をあらわすものは、ジェロンディフ句を時間的定位として解釈できることが多い。その際、支配節は一回性のできごとをあらわす。以下の例では、(91)、(94)が該当する。

- (88) Autour de lui [=le Soleil] gravitent huit planètes, sorties de ses entrailles mêmes aux premiers temps de la Création. Ce sont, **en allant** du plus proche de ces astres au plus éloigné, Mercure, Vénus, la Terre, Mars, Jupiter, Saturne, Uranus et Neptune.

(Jules Verne, *De la Terre à la Lune*, CT)

太陽のまわりに、太陽系がつくられた当初に、その母胎からわかれ出た **8** つの惑星が公転している。それらは、もっとも近い天体からもっとも遠い天体へと行く順で、水星、金星、地球、火星、木星、土星、天王星、海王星である。

- (89) Mais le golfe de Gascogne, de Cordouan à Biarritz, est une mer de contradictions, une énigme de combats. **En allant** vers le midi, elle devient tout à coup extraordinairement profonde, un abîme où l'eau s'engouffre.

(Jules Michelet, *La mer*, CT)

しかしガスコーニュ湾は、コルドゥアンからピアリッツにいたるまで、矛盾と、謎と、葛藤の海である。南にむかってゆくにつれ、その海は突如として異常に深くなり、水がながれこむ深淵となる。

- (90) Ses fils habitèrent depuis Havila jusqu'à Schur, qui est en face de l'Égypte, **en allant** vers l'Assyrie.

(*Genèse*, chapitre 25, section 18, CT)

イシュマエルの子孫は、ハヴィラから、エジプトに近い、アッシリアにむかって行く途中にあるシュールにわたって住みついた。(創世記)

- (91) Elle [=Béatrix Cenci] avait la bouche petite, les cheveux blonds et naturellement bouclés. **En allant** à la mort ces cheveux blonds et bouclés lui retombaient sur les yeux ce qui donnait une certaine grâce et portait à la compassion.

(Stendhal, *Les Cenci*, CT)

彼女 [=ベアトリーチェ・チェンチ] は小さな口で、自然にカールした金髪だった。死におもむくとき、彼女のカールした金髪は目の上にかぶさり、そのことである種の優美さがもたらされ、同情をひくのだった。

- (92) Enfin, **en descendant** vers notre âge, commencent ces voyages modernes où la civilisation laisse briller toutes ses ressources, la science tous ses moyens.

(François René de Chateaubriand, *Voyage en Amérique*, CT)

最後に、われわれの時代へとくだってくると、かの近代的な旅行というもののはじまるのである。そこでは、文明がそのすべての資源をかがやかせ、科学がそのすべての手段をかがやかせるのである。

- (93) **En descendant** vers le sud, les plantes et les animaux ont dû, dans l'une des grandes régions, se mélanger avec les productions indigènes de l'Amérique, et entrer en concurrence avec elles, et, dans l'autre grande région, avec les productions de l'ancien monde.

(Charles Darwin, *L'origine des espèces*, CT)

南へとくだってゆくと、植物や動物は、ある地方にはアメリカ在来のもものと混雑し競合するのに対し、別の地方では旧世界のもものと混雑し競合するのである。

- (94) **En descendant** de la carriole, le coeur lui battait bien fort, et la maison du beau-père — chaumière misérable et croulante — lui apparut plus splendide que tous les palais des contes de fées.

(Octave Mirbeau, *Le Concombre fugitif*, CT)

二輪馬車からおりると、心臓がとても大きく脈打った。そして、義父の家一みすばらしく、くずれかかった藁ぶきの家一が、おとぎ話のあらゆる宮殿よりすばしくみえた。

- (95) Près de la porte, à gauche **en entrant**, une malle plate décorée de plusieurs étiquettes, sur lesquelles, à midi, se lisaient facilement des noms de Compagnies anglaises de navigation.

(Jean de La Ville de Mirmont, *Mon ami le prophète*, CT)

とびらの近く、入って左がわに、多くの札がついた平らな行李、そしてそれらの札には、昼なら、イギリスの海運会社の名まえがたやすく読めるのだった。

- (96) Toute ma crainte **en entrant** dans les détails qu'elle [=ma deuxième partie] exige, et que j'ai encore resserrés le plus que j'ai pu, a été qu'elle ne m'éloignât de l'objet de la première, et qu'elle ne la séparât trop de la troisième.

(A. L. C. Destutt-Tracy, *Éléments d'idéologie*, CT)

本書の第2部が要求する、しかしできるかぎり簡潔にしようとつとめた詳細に立

ち入るとき、わたしのすべての危惧は、第2部が第1部の対象からわたしを遠ざけてしまうこと、そして、第3部から第1部をひき離してしまうのではないかということであった。

- (97) De René II à Drouot, **en passant** par Jeanne, une des formes du désintéressement, le devoir militaire a paru ici sous son plus bel aspect. (Maurice Barrès, *Un homme libre*, CT)

ルネ2世から、ジャンヌ・ダルクを経てドリュオーにいたるまで、公正無私のありかたのひとつ、軍事的なつとめが、ここではもっとも美しい側面を見せていた。

- (98) Or il y a, de Tostes aux Bertaux, six bonnes lieues de traverse, **en passant** par Longueville et Saint-Victor.

(Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, CT)

ところで、トストからベルトーまでは、ロングヴィルとサン＝ヴィクトールを経由で、たっぷり6里の距離がある。

- (99) Je mène une vie bien solitaire ; mais, **en passant** par les champs, il ne faut que trois quarts d'heure de marche pour gagner les Sablonnières. (Alain Fournier, *Le Grand Meaulnes*, CT)

わたしはかなり孤独な生活を送っている。しかし、野原を通ると、45分歩くだけで、サプロニエールにいたりつくことができる。[支配節は非人称構文]

移動動詞のジェロンディフのなかで、とくに文法化・成句化が顕著に進んでいるのが *en passant* である。「通りがかりに」という本来の意味から、「ついでに」という単なる副詞句への変化がみとめられる。

- (100) L'espace n'est pas signalé, d'où proviennent les mots. Au détour d'une ligne, quand surgit un élément du cadre, c'est **en passant**, vite jeté, sa fonction est purement indicative, signalétique.

(Jacques Séréna, *Fins de droit*, CT)

空間は名づけられていないが、そこからことばが出てくる。本筋をはなれば、枠組みの要素が出てくる場合でも、それは一過性のものであり、たちまち捨てられ、その機能は単なる目安、目印にすぎない。

- (101) — Fort ingénieux, en effet. Par ici, mes amis, par ici.

— Un verre de champagne **en passant**, n'oublia pas Blaireau.

(Alphonse Allais, *L'Affaire Blaireau*, CT)

—まったく、すばらしいですな。さあ、みなさん、こっちにいらっしやい。  
—ついでにシャンパーニュを一杯もらおうか、とブレローが忘れずに言った。

- (102) Une remarque **en passant**<sup>21</sup> : Au théâtre, le torseur chauve ne va jamais à l'orchestre : c'est au balcon toujours qu'il expose ses noeuds de cravate et va cacher son crâne.

(Nestor Roqueplan, *La vie parisienne*, CT)

ついでにひとつ註釈しておこう。劇場では、上半身を着かざっていないひと(?)はけっして平土間席に入れない。そのようなひとは、2階席でネクタイのむすび目をひと目にさらし、頭を隠しているものだ。

- (103) Et, toi-même, sous prétexte que tu crois avoir été mêlé à quelques-unes de mes affaires — dont tu ne connais, **soit dit en passant**, que la contrepartie — sous prétexte que tu détiens — du moins, tu vas le criant partout — quelques vagues papiers ... dont je me soucie, mon cher, comme de ça ! ...

(Octave Mirbeau, *Le jardin des supplices*, CT)

それで、きみ自身、わたしの仕事のいくつかを知っているからといって—ついでに—に言っておくが、きみはその仕事のカウンターパートの部分しか知らないのだ—そして、このような、わたしが気にかけているいくつかの漠然とした書類を手をしているからといって—すくなくとも、そのことをあちこちで言いふらしているよな—!

- (104) Un petit escabaud était rangé dans le placard à balais, (où **soit dit en passant**<sup>22</sup> il n'y avait que des pacs de bières vides) et à défaut de Chatterton, j'avais trouvé du ruban adhésif.

(Simon Boutreux, *La vengeance est un plat qui se déguste lentement*, CT)

小さな踏み台が、ほうきの収納庫におさめられていて (ついでに言うと、そこには、空のビールの包みしかなかった)、絶縁テープのかわりに、粘着リボンを見つけていた。

移動動詞のなかでの内訳をみると、ここでもまた、心理 / 認知動詞の場合と平行的に、積極的な移動をあらわす、意図性の高い動詞で不一致生起が多い傾向がある。en tombant (不一致例なし) のように非随意的なものは不一致例が少ない。

また, en tournant (不一致例なし), en courant (不一致2例) のように, 移動様態をあらわす動詞も不一致例が少なかった。その理由は, 3.2 節, 4.2 節でみたように, 様態をあらわすジェロンディフは, 基本的に主語一致用法であるからと思われる。

そのうち, en courant では, (105) のように直前の主たる移動動詞を修飾するものが圧倒的であった。(106) のように「大急ぎで」の意味に転じているものもあるが, いずれにしても様態の解釈がなされることには違いない。

- (105) Il sort **en courant**, après avoir envoyé des baisers à Yesouf.

(Louis Fréchette, *Véronica*, CT)

彼は, イェスーフにキスを与えたあと, 走って出ていく。

- (106) [アラビア人について] Peuples vagabonds, conquérants, voyageurs, ils ont imité **en courant** l'immuable Egypte ; ils se sont fait des obélisques de bois doré et des hiéroglyphes de plâtre, qu'ils pouvaient emporter avec leurs tentes sur le dos de leurs chameaux. (François René de Chateaubriand, *Itinéraire de Paris à Jérusalem et de Jérusalem à Paris*, CT)

放浪する, 征服者の, 旅をする民族であるので, かれらは大急ぎで不変不動のエジプトを模倣した。かれらは金箔を貼った木のオベリスクと, まがいもののヒエログリフをこしらえ, かれらの天幕とともに, ラクダの背のにせてもち歩くことができた。

en courant の不一致例は2例とも支配節が非人称のものであった。そのうちのひとつを(107)として引用しておこう。非人称の主語は「異なる主語」というよりも, 主語に関して中立なので, 積極的に不一致を生み出している事例とは言いがたい。以上のことから, en courant はアプリアリには主語不一致になじみにくいといえる。

- (107) [...] ; le parquet de nuée n'est pas solide, de sorte qu'**en courant** de-ça et de-là, il lui semblait marcher sur des plumes, et la nuée s'entr'ouvrant, elle avait beaucoup de peine de s'empêcher de tomber ; [...]

(Marie-Catherine Le Jumel de Barneville, *Babiole*, CT)

ひとかたまりの雲は固くはなかった。あちらこちらに走り回ると、羽根の上を歩いているような感じがした [非人称構文]。そして、雲が開きかけたので、彼女は落ちないようにするのにたいへん苦勞した。(妖精物語)

#### 4.3.3. 知覚動詞 (verbes de perception)

知覚動詞においては、1 動詞あたりの不一致生起は 26.3 ともっとも多いが、一致生起もたいへん多いため、不一致率は低かった。

不一致生起の数は、en voyant が多く (74例)、en sentant が少ない (1 例) ということ以外、特段の傾向は見あたらない (視覚動詞も聴覚動詞もさかんに使われる)。ただ、en voyant の不一致生起が多いといっても、一致もふくめた母数もたいへん多いので、不一致率は知覚動詞の中でもかえって低い。

知覚動詞間で比較したとき、ほかのカテゴリーの動詞で一般的にみられる、動作主性や意図性の高い動詞で不一致が多いという傾向は確認できない。動作主性・意図性で対比されうる entendre / écouter, voir / regarder のふたつの対でくらべてみると、en entendant の不一致生起率 5.6%, en écoutant は 7.3% であり、これだけをみていると意図性の高い動詞のほうが不一致生起率が高いが、en voyant (同 3.4%), en regardant (2.4%) では逆転する。もっとも、知覚動詞は動詞の数が少ないので、全体としてはっきりとした傾向が出るにいたらないのかもしれない。

支配節は知覚に対する主体の反応を示すものがもっとも多く、つぎに知覚から得た印象を示すものが多かった。以下に動詞ごとに例を見よう。

- (108) Tout **en écoutant** son mari qui parlait d'un air grave, l'oeil de Mme de Rênal suivait avec inquiétude les mouvements de trois petits garçons. (Stendhal, *Le Rouge et le Noir*, CT) <sup>23</sup>

重い調子で話していた夫の話をききながらも、レナール夫人の目は、3 人の男の子たちの動きを心配そうにおいかけていた。

- (109) Le désordre de mon âme, **en l'écoutant**, ne saurait être exprimé. (L'abbé Prévost, *Mémoires d'un Homme de Qualité*, CT)  
彼の話を聴くときのわたしの心の乱れ方は、ことばにはできないだろう。

- (110) **En l'écoutant**, toutes les têtes étaient penchées sur les poitrines, toutes les oreilles étaient tendues vers cette voix qui plaignait, comme la foudre, sous ces voûtes émuës.

(Jules Barbey d'Aureville, *Une histoire sans nom*, CT)

彼の話聴きながら、すべての頭が胸のほうにかたむき、すべての耳が、感動した頭のなかで雷のように舞うこの声にむかって澄まされていた。

- (111) Mais **en l'écoutant**, une idée m'était venue.

(Jules Claretie, *La Divette*, CT)

しかし、彼の話を書きいていて、ある考えがわたしにやってきた。

- (112) Si je m'endors, vous ne m'en voudrez pas, cela m'arrivera pour la première fois **en vous écoutant** ; au surplus, je vous prie de m'éveiller, c'est par devoir que je veux entendre, et je vous associe à mes devoirs. (Nestor Roqueplan, *La vie parisienne*, CT)

わたしが眠ってしまっても、わるく思わないでください。あなたの話をきくときにそんなことが起きるのははじめてのことですから。それに、わたしを起してくださるようお願いします。わたしは義務的にあなたの話をきかないといけないのですし、あなたをわたしの義務にむすびつけているのですから。

- (113) **En l'entendant**, il semble que Dieu tonne.

(Balzac, *Ferragus, Chef des dévorants*, CT)<sup>24</sup>

彼の話を書きいてると、神が雷鳴をとどかせているようだ。[支配節は非人称構文]

- (114) D'autres fois il semble qu'il y a des révoltes dans les sens de votre corps, même **en voyant**, en touchant, **en entendant** et **en sentant** les choses saintes ; quand vous vous en approchez, on dirait que tout apporte à vos sens un trouble honteux et corrupteur.

(Sainte Catherine de Sienne, *Traité de la Providence*, CT)

あるときには、聖なるものを見て、触れて、聞いて、感じていても、あなたの身体感覚のなかに怒りがあるようだ。すべてがあなたの感覚に、恥ずべき、墮落させる濁りをもたらすようだ。

- (115) Quel fut l'étonnement d'Oswald **en l'entendant** !

(Madame de Staël, *Corinne*, CT)

彼女の話を書いたとき、オズヴァルドの驚きはどんなだったか！

- (116) En effet, le promeneur, qui, pendant l'examen des deux amis, avait passé et repassé plusieurs fois derrière eux, s'était arrêté au nom de Winter ; mais comme sa figure n'avait exprimé

aucune émotion **en entendant** ce nom, ce pouvait être aussi bien le hasard qui l'avait fait s'arrêter.

(Alexandre Dumas, *Vingt ans après*, CT)

実際、案内人は、ふたりの友だちを調べている間、かれらの背後を何度も行ったり来たりして、ヴィンテルの名まえに目をとめた。しかし、かれの顔がその名まえをきいてもなんの感情も示さなかったから、偶然が彼を立ちどまらせたのかもしれない。

- (117) Mon amie, je ne dors guère, et **en entendant** sonner quatre heures, votre souvenir me revient toujours.

(Laure Conan, *Angéline de Montbrun*, CT)

愛するひとよ、わたしはほとんど眠れません。4時の鐘がなるのをきくと、あなたの思い出がいつもわたしによみがえってきます。

- (118) Souvent, **en la regardant**, il lui semblait que son âme, s'échappant vers elle, se répandait comme une onde sur le contour de sa tête, et descendait entraînée dans la blancheur de sa poitrine.

(Gustave Flaubert, *Madame Bovary*, CT)

しばしば、彼女をみていると、かれのたましいが、彼女のほうへと逃げてゆき、かれの頭のまわりを音波のようにひろがり、彼女の胸の白さへと惹きつけられておりてゆくように感じられた。[支配節は非人称構文]

- (119) D'ailleurs on voyait de là, à travers les arbres qui étaient plus d'à moitié dépouillés de feuilles, la petite clarté qui sortait de la maison de la mère Fadet ; et **en regardant** cette clarté, pour peu qu'on marchât dans la direction, il n'y avait point chance de faire mauvaise route.

(George Sand, *La Petite Fadette*, CT)

しかもそこから、半分以上葉を切られた木々のあいだを通して、ファデー母さんの家から出てくる小さな明かりがみえた。そして、その明かりをながめながら、その方向にあるいて行きさえすれば、道をまちがえるおそれはなかった。[支配節は非人称構文]

- (120) J'essayais de donner du courage à mes pauvres parents qui sanglotaient sans cesse. Mon coeur se brisait de chagrin **en les regardant**.

(Alexsandre Okinczyc, *Mémoires*, CT)

ずっとすすり泣いている両親に、勇気を与えようとした。かれらを見ていると、わたしの心は悲しみでくだけそうだった。



- (121) Il pouvait encore s'embarquer sur deux lougres qui devaient joindre en mer un navire danois (c'est le parti que prit son frère Joseph) ; mais la résolution lui faillit **en regardant** le rivage de France.

(François René de Chateaubriand, *Mémoires d'Outre-tombe*, CT)

かれはなお、デンマークの船に沖合で接触する２隻のラガー（帆船）に乗ることができた（それがかれの弟のジョゼフがとる方針だった）。しかし、フランスの海岸をみると、かれには決心が欠けていた。

- (122) Cela l'amusait beaucoup, **en le regardant** de tout près, de tout près, dans les yeux, de le voir se retirer, se cambrer d'un air de dignité offensée, en dodelinant de la tête avec un tic d'ours.

(Pierre Loti, *Mon frère Yves*, CT)

近くから、近くから彼を見つめて、彼がしりぞき、まるでクマが痙攣するように頭にゆさぶって、威厳が侵されたかのように反り身になるの見ることは、彼（別人）をたいそう楽しませるのだった。

- (123) **En regardant** le feu, pendant des heures et des heures, le passé renaît comme si c'était d'hier.

(Guy de Maupassant, *Souvenirs*, CT)

火を何時間も何時間も見つめていると、過去がまるできのうのようによみがえってくる。

- (124) C'étaient les tombeaux des anciens rois de Thèbes ; mais Argyropoulos ne s'y arrêta pas, et conduisit ses voyageurs par une espèce de rampe qui ne semblait d'abord qu'une écorchure au flanc de la montagne, et qu'interrompaient plusieurs fois des masses éboulées, à une sorte d'étroit plateau, de corniche en saillie sur la paroi verticale, où les rochers, en apparence groupés au hasard, avaient pourtant, **en y regardant** bien, une espèce de symétrie. (Theophile Gautier, *Le roman de la Momie*, CT)

そこはかつてのテーベの王たちの墓だった。しかし、アルギュロプロスは足をとめず、坂道のようなところへと旅人たちをみちびいた。その坂道は、一見したところ、山の斜面にきざまれた傷のようにはかみえなかった。そこに何度もひとびとが倒れてできた、ある種のせまい台ようになっていた。垂直の壁面に突出した懸崖であり、そこに一見でたらめに並べられた岩が、よく見ると、

ある種の対称性をなしていた。

- (125) C'est, sans doute, parce que la persistance de certaines choses, de tout temps connues, arrive à nous leurrer sur notre propre stabilité, sur notre propre durée ; **en les voyant** demeurer les mêmes, il nous semble que nous ne pouvons pas changer ni cesser d'être. (Pierre Loti, *Le Roman d'un enfant*, CT)

それはおそらく、ながらく知られているいくつかのものの持続が、われわれ自身の安定性、われわれ自身の持続に対する幻想をいだかせるにいたるからであろう。それらのものが同じでありつづけるのを見ていると、われわれも変わることはありえず、消えてなくなることもないような気がするのだ。[支配節は非人称構文]

- (126) La marquise resta debout, immobile. **En voyant** Arthur pâle, maigre et hâve, il n'y avait plus de sévérité possible.

(H. de Balzac, *La femme de trente ans*, CT)

侯爵夫人は立ったまま、不動の姿勢だった。アルチュールが青白く、痩せて、やつれているのをみたら、もはや峻厳さはありえなかった。[支配節は非人称構文]

- (127) Le coeur de la gitana se serra **en voyant** ces pauvres joues pâles et ces yeux éteints déjà par les pleurs.

(Paul Féval Père, *Le Bossu*, CT)

かわいそうな青白いほほ、涙ですでに閉じられた目をみると、ジブシー女のこころはしめつけられた。

- (128) Ses cris cessèrent **en me voyant** ; il ignorait peut-être en avoir poussé de si lamentables et avoir été entendu.

(Sainte-Beuve, *Volupté*, CT)

わたしを見て、かれのさけび声は止んだ。かれはこんなに情けないさけび声をあげて、それが聞かれたということがわかっていなかったのかもしれない。

- (129) Mon espoir disparut, **en voyant** tes différentes liaisons avec les Donis, les Grillo, les Borghèse, et je me désespérai bien plus encore, quand je sus que tu avais retrouvé Clairwil...

(Marquis de Sade, *Histoire de Juliette*, CT)<sup>25</sup>

君のドニス家、グリッロ家、ボルゲーゼ家とのさまざまな関係をみて（理解して）、わたしの希望は消えた。そして、わたしは、きみがクレールヴィルと再会していたことを知って、ますます絶望した。

- (130) Il [=Mouret] cédait enfin à la séduction, la foi lui [=au baron] était venue, **en le voyant** au milieu de ces dames.

(Émile Zola, *Au Bonheur des dames*, CT)

ムレはついに誘惑に屈したのだ... その信念は、ムレを女のひとたちのあいだに見かけたとき、男爵にやってきた。

#### 4.3.4. 行為動詞 (verbes d'action)

行為動詞のなかでは、*en attendant* (不一致116例)、*en parlant* (40例)、*en lisant* (28例)、*en écrivant* (20例)のように、なにほどこは精神的な作用をふくむ、心理 / 認知寄りの行為動詞で不一致生起が多い傾向がある。それに対して、*en gardant* (不一致例なし)、*en portant* (不一致例なし) など、状態動詞寄りの行為動詞は不一致例が少ない。

- (131) Cesarotti a fait la meilleure et la plus élégante traduction d'Ossian qu'il y ait ; mais il semble, **en la lisant**, que les mots ont en eux-mêmes un air de fête qui contraste avec les idées sombres qu'ils rappellent.

(Madame de Staël, *Corinne*, CT)

チェザロッティは、オシアン之最善でもっとも優美な翻訳をした。しかし、その翻訳を読んでいると、語がそれら自体で祝祭の雰囲気をもっているようであり、それらが示す暗い思想とは対照的である。[支配節は非人称構文]

- (132) Mon coeur battait avec une douce violence **en les lisant**, et il a peine à se calmer.

(Amélie Suard, *Essais de mémoires sur M. Suard*, CT)

それらを読むとき、わたしの心臓は甘美な激しさで脈うち、自らをしずめるのに苦労した。

- (133) Ma grande découverte **en lisant** cet article est qu'il y avait largement plein de trucs intéressants qui se passaient là où je n'étais pas.

(Pierre Ernoult, *Rovaniemi*, CT)

この記事を読んだとき、わたしの大きな発見は、わたしがいなかったところで、ひろく、多くの興味深いことがあったということだ。

- (134) Un sentiment de familiarité nous frappe **en lisant** « Les trois cheveux d'or du diable ». (Patrice Deramaix, *Essai d'analyse d'un conte des frères Grimm « Les trois cheveux d'or du diable »*, CT)

『悪魔の3本の金の髪』を読んでいると、われわれは親近感をおぼえる（直訳：親近感がわれわれを打つ）。

- (135) Je voudrais vous faire part d'une réflexion qui me vint un jour **en lisant** un sermon de votre admirable Bourdaloue ; mais j'ai peur que vous ne me traitiez encore d'illuminé.

(Joseph de Maistre, *Les Soirées de Saint-Petersbourg*, CT)

ある日、あなたのすばらしいブルダルーの説教を読んでいたときにわたしにやってきた考察をあなたにお知らせしたいのです。しかし、わたしは、あなたがわたしをまた狂信者として扱うのではないかとおそれています。

- (136) **En t'écrivant**, ajoutait-elle, cette lettre qu'un messenger de ma mère attend, il me semble que j'ai eu le plus grand tort de lui tout dire. (Stendhal, *L'Abbesse de Castro*, CT)

わたしの母の使いのものがまっているこの手紙をあなたに書いておりますとーと彼女はつづくわえたー、わたしが彼にすべてを話してしまったのは大きな間違いだという気がします。

- (137) **En écrivant** cette préface, mon but n'est pas de rechercher oiseusement si j'ai mis au théâtre une pièce bonne ou mauvaise ; il n'est plus temps pour moi : mais d'examiner scrupuleusement (et je le dois toujours) si j'ai fait une oeuvre blâmable. (Pierre Augustin Caron de Beaumarchais, *Le mariage de Figaro*, CT)

この序文を書くとき、わたしの目標は、わたしがよい作品を上映したか、わるい作品を上演したかをぼんやりと探しもとめることではない。わたしにとって、もはや、そんなときではない。そうではなく、わたしが責められるべき作品を作ったのかを綿密に検討することである（そして、わたしはつねにそうしなければならない）。

- (138) **En écrivant** ces lignes vengeresses, le rouge me monte au front ; car il y a malheureusement des auteurs de SF qui sont les suivants de Boileau (avant qu'il ne connût Narcejac).

(Jacques Sadoul, *Mothers of Invention*, CT)

この復讐のくだりを書いていると、わたしの額に赤みがのぼってきた。というのも、残念ながら、ボワロー（[のちの共著者の] ナルスジャックを知るまえの）の追随者であるSF作家が何人もいるのだ。

- (139) **En parlant** ainsi dans son jargon, ses yeux devenaient sérieux. Je

savais qu'elle était de Naples, et malgré elle, **en parlant** d'amour son Italie lui battait dans le coeur.

(Alfred de Musset, *La confession d'un enfant du siècle*, CT)

彼女の隠語で話していると、彼女の目は真剣になってくる。わたしは彼女がナポリ出身だと知っていた。愛を語るとき、彼女の意に反して、彼女の故国イタリアが彼女の心臓のなかで脈打っていた。

- (140) Mais **en lui parlant** d'amour, il lui semblait qu'elle jouait la comédie. (Stendhal, *Vanina Vanini*, CT)

しかし、彼に愛を語るとき、彼女は喜劇を演じているような心もちがした。

- (141) Laisse-moi donc continuer, la peine se dissipe **en parlant** ; [...] (Louis Bouilhet, *Melaenis, conte romain*, CT)

わたしに話をつづけさせてください。話していると苦しみは消えるでしょう。

また、成句になることによって実質的に心理 / 認知系になるものもある。たとえば *en faisant* は不一致 36 例であるが、その内実は *faire abstraction*, *faire l'économie*, *faire exception* などの成句がほとんどで、動詞句全体としては心理 / 認知動詞として機能するものが多い。

- (142) On voit qu'**en faisant abstraction** des végétaux dont la détermination est tout à fait douteuse, ces formes se rapportent à sept familles différentes : [...] (M. Ad. Brongniart, *Etudes sur les graines fossiles trouvées à l'état silicifié dans le terrain houiller de Saint-Etienne*, CT)

画定がまったくうたがわしい植物を捨象すれば、これらの形は、7つのことなる目 [生物種の分類] にかかわる。

- (143) Or on a vu que, sur ce point aussi, Leibniz s'accrochait avec Descartes : puisque le second critère de la substance chez Descartes c'était — vous vous rappelez — la distinction réelle : que deux choses soient conçues sans que l'une soit pensée **en faisant intervenir** des éléments de l'autre. (Deleuze, *Leibniz*, CT)

ところで、すでにみたように、ライブニッツはデカルトに執着している。というのも、デカルトの実質の第二の基準は、一ご記憶のとおり—現実の区別である。一方が、他方の要素を介入させては考えられないようなかたちでふたつの

ものが考えられるでしょう。

- (144) Et cette question — l'avènement de la pensée anticipatrice — ne pourra être élucidée **en faisant** l'économie de la pensée du temps : l'événement est ce qui advient à l'être lorsqu'il perd son indétermination première pour se différencier comme étant.

(Patrice Deramaix, *Logos et totalité*, CT)

そして、この問題—予測的な観念の到来—は、時間の観念をぬきにしては説明できないだろう。できごととは、当初の不定性を失い、存在するものとして異化するときに出てくるものである。

- (145) Les mosquées de Sultan-Haçan, d'Émir-Khour, de Setti-Zayneb, d'El-Mouyed, d'El-Azar, du Moristan, de Haçanin, les mosquées de Touloun, de Boulaq et cent autres [...] sont, **en faisant exception** de la mosquée d'Omar à Jérusalem, les plus merveilleux temples musulmans que j'aie vus dans mes voyages.

(Maxime Du Camp, *Le Nil : Égypte et Nubie*, CT)

スルタン＝ハサンのモスク、エミール＝クール・のモスク、セッティ＝ザイネーブのモスク、エル＝ムイェードのモスク、エル＝アザールのモスク、ハサニンのモスク、トゥーロン・のモスク、ブーラックのモスク、そして、100 ものほかのモスク [中略] は、イエルサレムのオマルのモスクを例外として、わたしが旅でみたもっともすばらしいイスラームの寺院である。

en attendant には高度な文法化・成句化がみられる。本来の「待つ」意味がうすれ、「とりあえず」「さしあたり」「当面は」という意味の副詞句と化している。しかし、全面的に成句化しているわけではなく、以下にみるように、動詞 attendre の意図性、動作主性を保っている事例もあり、熟語的凝結 (figement) のさまざまな度合いが確認できる<sup>26</sup>。

- (146) **En attendant** l'abolition de l'esclavage par des transformations graduelles, l'émancipation du sexe féminin commençait.

(François René de Chateaubriand, *Études historiques*, CT)

段階的な変化による奴隷制の廃止を待つあいだ、女性の解放がはじまっていた。

- (147) **En attendant**, les jours succéderont aux jours, et il en viendra peut-être de meilleurs pour toi.

(Théophile Gautier, *Le Roman de la Momie*, CT)

待っていれば、日々がうちつづき、そのうちきみによってもっとよい日々がくるかもしれないよ。

(148) **En attendant**, il pleut à verse. Jamais je n'ai vu tomber tant d'eau.

(Laure Conan, *Angéline de Montbrun*, CT)

さしあたり、大雨がふっていた。わたしはあんなに多くの雨がふるのをみたことがない。

(149) **En attendant**, il est clair que cette nouvelle masse d'argent aura nécessairement réveillé l'industrie à son premier passage.

(François Véron de Forbonnais, *Espèces*, CT)

当面は、あきらかに、この新たな大量のお金が出てくるやいなや、かならず産業をよびおこしただろう。

(146)では attendre が直接目的補語をとっており、通例的な他動詞用法であるといえる。また、(147)は「待てば」という積極的な選択をあらわす假定用法であり、やはり「待つ」という本来の意味が生きている。それに対して、(148)、(149)では、「さしあたり」「当面は」といった副詞句的な意味になっているといえよう。単に副詞句として解釈されるということは、支配節の構成や内容に制限がなくなるということであり、主語不一致ジェロンディフが多く使われる重要な契機のひとつになる。

#### 4.3.5. 状態動詞 (verbes d'état)

状態動詞では、1 動詞あたりの不一致生起がもっとも少なかった。être (不一致例なし)、en se trouvant (不一致例なし)、en vivant (不一致例なし) などである。ただし、一致もふくめた母数が少ないので、不一致率は低くない。

数すくない不一致例には、en ayant soin, en ayant égard, en tenant compte など、心理 / 認知系の成句が多かった。

(150)は la France d'entrer dans... の部分を二次的叙述とみなせば、その主語の la France がジェロンディフの主語になる。(151)、(152)はいずれも受動態で、その暗黙の動作主がジェロンディフの主語になる。このように、いわば表面的な、統辞的理由でかろうじて不一致になっているものが多い。

(150) Rien ne doit donc empêcher la France d'entrer dans des

négociations en ayant soin de les rapprocher le plus possible de l'esprit dans lequel cette Note est rédigée.

(François René de Chateaubriand, *Mémoires d'Outre-tombe*, CT)

この註釈が書かれた精神に可能なかぎり交渉を近づけるよう留意しながら, フランスが交渉に入ることをさまたげるものは何もあってはならない。

- (151) Sur terre, les temps de la chasse sont réglés ; ceux de la pêche doivent l'être également, en ayant égard aux saisons où se reproduit chaque espèce. (Jules Michelet, *La mer*, CT)

地上では、狩猟の時期は終わった。それぞれの種が再生産される季節を考慮すると、収穫の時期も同様に終わるだろう。

- (152) Le siège d'autres organismes et services créés ou à créer sera décidé d'un commun accord par les représentants des gouvernements des États membres lors d'un prochain Conseil européen, en tenant compte des avantages des dispositions ci-dessus pour les États membres intéressés et en donnant une priorité appropriée aux États membres qui, à l'heure actuelle, n'abritent pas le siège d'une institution des Communautés.

(*Décision prise du commun accord des représentants des gouvernements des États membres relative à la fixation des sièges des institutions et de certains organismes et services des Communautés européennes* (JOC 341 du 23/12/1992), CT)

創設された、あるいは創設されるべき他の組織や部局の本部は、次回の欧州議会の折に、関係する加盟各国に対する組織等の利点を考慮し, かつ現在欧州連合の組織の本部を擁していない加盟国に優先権を与えつつ、加盟各国政府代表の合意によって決められる。

#### 4.3.6. まとめ

これまでの観察をまとめると、つぎのようなことがいえると思われる。

- ・心理 / 認知動詞が主語不一致ジェロンディフで用いられる動詞の典型であり、他の事行類型の動詞も、心理 / 認知動詞に類似した性質を帯びていればいるほど、主語不一致ジェロンディフで使われやすい。
- ・主語不一致用法のジェロンディフにおかれる動詞として、動作主性、意図性の高い動詞が好まれる。逆に、状态的、あるいは非随意的行為をあらわす動



詞は好まれない。

なお、動態動詞 (verbes dynamiques) が好まれること自体は、主語不一致にかぎらずジェロンディフ全般の特性である (西村 1991, 2011 は裸現在分詞との対比において、武本 2011 は < à + 不定法 > との対比において、そして渡邊 2011 は < 前置詞 en + 名詞 > の用法との関連づけによって、そのことを述べている) ので、その点を主語不一致ジェロンディフの特性として指摘することには反論があるかもしれないが、不一致の場合は、心理 / 認知動詞に近ければ近いほど使われやすいという意味的な特質との組みあわせが問題になっており、さらに次節でみてゆく支配節の諸条件とも相互に作用しているため、あくまでもそれら全体としてつながった条件の一角をなしていると考えることができる。

#### 4.4. 支配節の諸条件

つぎに、支配節のいかなる条件が主語不一致ジェロンディフをひきおこすかをみてゆこう。主語不一致ジェロンディフとの共起が明確に確認できた条件には、つぎの(153)に枚挙するようなものがある。あとでそれぞれの条件について個別に例を見てゆくので、その章節番号をあわせて示している。

(153) 主語不一致ジェロンディフ成立に作用する統辞的条件

- a. 非人称構文 ⇒ §.4.4.1.
- b. 擬似分裂文 ⇒ §.4.4.2.
- c. 受動態, または受動的代名動詞 ⇒ §.4.4.3.
- d. 経験者目的補語 ⇒ §.4.4.4.
- d'. 暗黙化された経験者・認知主体 ⇒ §.4.4.5.
- e. 所有をあらわす表現 (所有形容詞, de 前置詞句, 関係詞 dont など) ⇒ §.4.4.6.
- e'. 所有表現をともなわない身体部分表現など ⇒ §.4.4.7.
- f. 支配節が c'est... で, 属詞位置または主題位置にジェロンディフがくる場合 (C'est... que 分裂文をのぞく) ⇒ §.4.4.8.

(153) の諸条件のうち, a, b, f のいずれかの条件がみたされた場合は, 4.1 節でのべた分類方法からわかるように, ほとんど自動的に主語不一致ジェロンディフになる。一方, c ~ e の条件は, 主語不一致ジェロンディフの生起を比

較的うながしやすい、相対的な条件である。以下では条件ごとに例文を確認しながら論ずる。

(153) にあげた諸条件が観察される例数を動詞ごとに計数し、さらに、支配節の動詞の語彙的アスペクト (非有界 (non-borné), 有界 (borné), 非動詞文), および動詞の時制・叙法も計数した結果は、この論文の末尾の<附録>の表のとおりであった。さらに、そのデータを動詞事行の種類別に再集計した結果は、つぎの(154)および(155)の表のとおりであった。

(154) 表：主語不一致ジェロンディフの支配節の諸特徴、動詞事行の種類別集計 (生起数)

動詞事行類型	統 辞 的 ・ 意 味 的 特 徴 (複数条件の兼ね合いあり)								動詞の語彙的アスペクト		
	非人称構文	擬似分裂文	受動態または受動的代名動詞	経験者目的補語	暗黙の認知主体	所有表現	所有表現のない部分の名詞	C'est (C'est...que 分裂文をのぞく)	非有界 (non-borné)	有界 (borné)	非動詞文
心理/認知動詞	83	4	14	49	222	54	5	9	331	81	18
移動動詞	48	9	14	77	139	69	9	6	254	75	13
知覚動詞	22	0	4	40	32	62	7	2	106	51	1
行為動詞	109	11	33	112	164	102	6	14	385	93	36
状態動詞	7	0	5	5	16	2	1	0	29	7	2
総 計	269	24	70	283	573	289	28	31	1105	307	70

動詞事行類型	叙 法 お よ び 時 制																	不一致の 総数
	現 在 形	複 合 過 去 形	半 過 去 形	大 過 去 形	単 純 過 去 形	前 過 去 形	単 純 未 来 形	前 未 来 形	条 件 法 現 在 形	条 件 法 過 去 形	接 続 法 現 在 形	接 続 法 過 去 形	接 続 法 半 過 去 形	接 続 法 大 過 去 形	命 令 法	非 定 型 ま た は 非 動 詞 文		
心理 / 認知動詞	160	13	58	7	45	0	29	1	76	12	3	0	0	3	1	22	430	
移動動詞	95	24	78	9	72	2	4	0	5	0	39	0	0	0	1	12	341	
知覚動詞	44	6	36	5	51	0	3	0	4	1	0	0	0	0	1	7	158	
行為動詞	199	21	124	11	61	1	35	0	17	0	3	0	1	2	2	40	517	
状態動詞	14	2	6	2	1	0	4	0	4	0	0	0	0	0	1	2	36	
総 計	512	66	302	34	230	3	75	1	106	13	45	0	1	5	6	83	1482	

(155) 表：主語不一致ジェロンディフの支配節の諸特徴、動詞事行の種類別集計（横方向に類型別不一致総数を母数とした割合）

動詞事行類型	統 辞 的 ・ 意 味 的 特 徴（複数条件の兼ね合いあり）								動詞の語彙的アスペクト		
	非人称 構文	擬似分 裂文	受動態または 受動的代 名動詞	経験者 目的補語	暗黙の 認知主体	所有 表現	所有表現 のない部 分の名詞	C'est (C'est...que 分裂文をのぞく)	非有界 (non- borné)	有界 (borné)	非動詞文
心理 / 認知動詞	19.3%	0.9%	3.3%	11.4%	51.6%	12.6%	1.2%	2.1%	77.0%	18.8%	4.2%
移動動詞	14.1%	2.6%	4.1%	22.6%	40.8%	20.2%	2.6%	1.8%	74.5%	22.0%	3.8%
知覚動詞	13.9%	0.0%	2.5%	25.3%	20.3%	39.2%	4.4%	1.3%	67.1%	32.3%	0.6%
行為動詞	21.1%	2.1%	6.4%	21.7%	31.7%	19.7%	1.2%	2.7%	74.5%	18.0%	7.0%
状態動詞	19.4%	0.0%	13.9%	13.9%	44.4%	5.6%	2.8%	0.0%	80.6%	19.4%	5.6%
総 計	18.2%	1.6%	4.7%	19.1%	38.7%	19.5%	1.9%	2.1%	74.6%	20.7%	4.7%

動詞事行類型	叙 法 お よ び 時 制																不一致の 総数
	現 在 形	複 合 過 去 形	半 過 去 形	大 過 去 形	単 純 過 去 形	前 過 去 形	単 純 未 来 形	前 未 来 形	条 件 法 現 在 形	条 件 法 過 去 形	接 続 法 現 在 形	接 続 法 過 去 形	接 続 法 半 過 去 形	接 続 法 大 過 去 形	命 令 法	非 定 型 または 非 動 詞 文	
心理 / 認知動詞	37.2%	37.2%	13.5%	1.6%	10.5%	0.0%	6.7%	0.2%	17.7%	2.8%	0.7%	0.0%	0.0%	0.7%	0.2%	5.1%	100.0%
移動動詞	27.9%	7.0%	22.9%	2.6%	21.1%	0.6%	1.2%	0.0%	1.5%	0.0%	11.4%	0.0%	0.0%	0.0%	0.3%	3.5%	100.0%
知覚動詞	27.8%	3.8%	22.8%	3.2%	32.3%	0.0%	1.9%	0.0%	2.5%	0.6%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.6%	4.4%	100.0%
行為動詞	38.5%	4.1%	24.0%	2.1%	11.8%	0.2%	6.8%	0.0%	3.3%	0.0%	0.6%	0.0%	0.2%	0.4%	0.4%	7.7%	100.0%
状態動詞	38.9%	5.6%	16.7%	5.6%	2.8%	0.0%	11.1%	0.0%	11.1%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	0.0%	2.8%	5.6%	100.0%
総 計	34.5%	4.5%	20.4%	2.3%	15.5%	0.2%	5.1%	0.1%	7.2%	0.9%	3.0%	0.0%	0.1%	0.3%	0.4%	5.6%	100.0%

個別の事例を論ずるのは次節以降のこととして、まずは全体的な観察をしてみよう。

「統辞的・意味的特徴」では、「暗黙の認知主体」の条件が卓越している。しかも、実はこの条件のみ、ほかの条件との兼ね合いを認めると、結局、「経験者目的補語」以外のほとんど総数が該当してしまうため、ほかの条件をもっていないものだけをカウントしている。それでもなお最多であり、主語不一致ジェロンディフを成立させるもっとも重要な要因であるといえる。

「動詞の語彙的アスペクト」では、状態相を中心とする「非有界」が 1106 例（74.6%）と多くなっている。「統辞的・意味的特徴」の観察とあわせ考えると、事態内部に視点をおき、認知される（または想定される）状況を状態的にえがき出す場合がひとつの典型と考えられる。

時制、叙法については、残念ながらあまりはっきりとした傾向を発見するに  
はいたっていない。一応、単一の時制としては直説法現在が最多ではあるが、半  
過去形、単純過去形をあわせるとそれを上まわる（複合過去形、大過去形など、  
ほかの過去時制もあわせるとさらに大きくなる）ので、現在形がとりたてて好  
まれるとまではいえない。

#### 4.4.1. 非人称構文

非人称構文は現象そのものをえがき出す構文であり、主体の痕跡は最小限で  
ある。すなわち、認知主体を表現せず、認知される内容だけを表現する構文で  
ある。認知主体は（156）の間接目的補語代名詞 *me* のように経験者目的補語  
としてあらわれることもあるが、（157）、（158）のように表現にあらわれない  
こともある。しかしその場合も、*il nous suffirait, il ne me faut que...* のよう  
に間接目的補語を挿入しようと思えばできる場合が多いことからわかるよう  
に、意味的には認知主体が潜在しているのである。

- (156) [...] je vous avoue que je ne me suis pas trop informé de quelle  
manière il plaît à Dieu d'exercer sa justice, quoique, à vous dire  
vrai, il me semble, **en réfléchissant** sur ce qui se passe dans le  
monde, que s'il punit dès cette vie, au moins il ne se presse pas.

(Joseph de Maistre, *Les Soirées de Saint-Petersbourg*, CT)

[...] 告白しますが、正義の裁きをおこなうことがどんなふうに神のお気に召す  
のか、わたしはあまり学んでいません。しかし、本当のことをいいますと、世  
界で起きていることについて考えてみますと、神は現世のうちに罰をお与えに  
なるのだとしても、すくなくとも、急いではおられないような気がします。

- (157) Or, à deux cent quarante milles par douze heures, ce qui n'ap-  
proche pas de la vitesse de nos chemins de fer, **en voyageant**  
jour et nuit, il suffirait de sept jours pour traverser l'Afrique.

(Jules Verne, *Cinq semaines en ballon*, CT)

ところで、12時間で240マイルという速度では、われわれの鉄道の速度には  
遠く及ばないものの、昼も夜も走れば、7日あればアフリカを横断できた。

- (158) [= (99)] Je mène une vie bien solitaire ; mais, **en passant** par les  
champs, il ne faut que trois quarts d'heure de marche pour ga-  
agner les Sablonnières.

#### 4.4.2. 擬似分裂文

擬似分裂文 *Ce qui / que..., c'est...* は、主題部分と説述部分を分割し、情報構造を明確にするために用いられる形式的な主部、述部であり、その形式性のゆえにジェロンディフの主語とあいられないことが圧倒的に多く、それゆえ主語不一致になることがたいへん多い（擬似分裂文でも主語一致になる例外については 4.1 節でのべた）。擬似分裂文がもたらす形式的な組み合わせは、動詞の項構造より高次の、メタ認知のレベルで機能しているといえる。

- (159) *Ce qui, en entrant, frappait d'abord le regard, c'était entre deux larges fenêtres une haute statue de la Liberté.*

(Victor Hugo, *Quatre-vingt-treize*, CT)

入るときに視線をおどろかせるものは、二つのはばの広い窓のあいだにある、背の高い自由の女神像だった。

- (160) *Ce qui les étonnait en s'approchant c'était de ne pas entendre les chiens aboyer ni de voir la fumée s'échapper du toit.*

(Alexandre Okinczyc, *Mémoires*, CT)

近づいたとき、彼らをおどろかせたことは、犬がほえるのもきこえなければ、屋根から煙があがるのもみえないことだった。

- (161) *Ce que je vis, en ouvrant la porte, me terrifia.*

(Alphonse Daudet, *Le Petit Chose*, CT)

とびらをあけてわたしが見たものは、わたしをこわがらせた。

#### 4.4.3. 受動態、または受動的代名動詞

受動態は、その動作主がジェロンディフの主語になる場合、主語不一致をひきおこす。

- (162) [= (143)] *Or on a vu que, sur ce point aussi, Leibniz s'accrochait avec Descartes : puisque le second critère de la substance chez Descartes c'était — vous vous rappelez — la distinction réelle : que deux choses soient conçues sans que l'une soit pensée en faisant intervenir des éléments de l'autre.*

- (163) *Six hommes, le poignard à la main, prièrent Son Altesse d'y en-*

trer, lui disant que l'air frais de la nuit pourrait nuire à sa voix ; on affectait les formes les plus respectueuses, le nom de prince était répété à chaque instant, et presque **en criant**.

(Stendhal, *La Chartreuse de Parme*, CT)

6人の男が、短刀を手に、夜のつめたい空気は声に悪いかもしれないといって、入ってくださいと殿下に申し上げていた。最大限の尊敬のかたちが用いられていた。王子の名が絶えず、ほとんど叫ぶようにくりかえされていた。

受動的代名動詞も、その動作主がジェロンディフの主語になる場合、主語不一致をひきおこす。

- (164) Jésus-Christ n'a fait autre chose qu'apprendre aux hommes qu'ils s'aimaient eux-mêmes, et qu'ils étaient esclaves, aveugles, malades, malheureux, et pécheurs ; qu'il fallait qu'il les délivrât, éclairât, béatifiât, et guérît ; que cela se ferait **en se haïssant** soi-même, et **en le suivant** par la misère et la mort de la croix.

(Pascal, *Pensées*, CT)

キリストはひとびとに、彼らが互いに愛し合っていること、彼らは奴隷で、病人で、不幸で、罪人であること、神が彼らを解放し、啓蒙し、列福し、治癒すること、そして、それらのことは、自分自身を憎むことで、そして貧窮と、死と、十字架によって神にしたがうことでなされるということを教えただけだった。

- (165) L'extrait gras du haschisch, tel que le préparent les Arabes, s'obtient **en faisant** bouillir les sommités de la plante fraîche dans du beurre avec un peu d'eau.

(Charles Baudelaire, *Les paradis artificiels*, CT)

アラブ人たちが作るような、ハッシッシの脂ぎった樹脂は、その植物の新鮮な茎の先端をバターと少しの水のなかで沸きたたせることによって得られる。

支配節にあらわれる受動態、受動的代名動詞は、いずれも、対応する能動態にくらべれば、動作主を背景化するはたらきがあり、「[する]型の表現に対立する」「[なる]型の表現であるといえる」<sup>27</sup>。

#### 4.4.4. 経験者目的補語

経験者は心理動詞の要求する項であり、(166)のように直接目的補語としてあらわれる場合と、(167)のように間接目的補語としてあらわれる場合がある。ジェロンディフの主語が支配節の主語ではなく、経験者目的補語と同一指示になることにより、主語不一致ジェロンディフになる。経験者が主語に立つ主語一致ジェロンディフの場合にくらべると、事態本位の表現法であり、経験者が事態や心理状態をそのまっただ中で感知する事例であるといえる<sup>28</sup>。

- (166) La première personne qui le frappa **en entrant** fut Aramis, installé près d'un fauteuil à roulettes, fort large, recouvert d'un dais en tapisserie, sous lequel s'agitait, enveloppée dans une couverture de brocart, une petite figure assez jeune, assez rieuse, mais parfois pâissante, sans que ses yeux cessassent néanmoins d'exprimer un sentiment vif, spirituel ou gracieux.

(Alexandre Dumas, *Vingt ans après*, CT)

入ったとき、まず彼をおどろかせたのは、アラミスだった。たいへん幅が広く、じゅうたんでできた天蓋におおわれた、脚輪つきの椅子の近くに身をおちつけていた。天蓋の下には、絹織物の羽織りものをまとった、かなり若く、笑みをたたえた、ちいさな顔があった。その顔はときどき青白くなるが、その目は生き生きとした、機知にとんだ、優美な感情をあらわすことをやめないものであった。

- (167) [...] **en marchant**, la lune, qu'elle avait à sa gauche et sur le fil de l'horizon, lui semblait marcher du même pas qu'elle, et lui faisait l'effet d'une tête de mort qui l'aurait obstinément accompagnée. (Jules Barbey d'Aureville, *Une histoire sans nom*, CT)  
[...] 歩いていると、彼女の左の、地平線にそって見えていた月が、彼女とおなじ歩みで歩いているように、そして、まるで執拗につきまとってくる髑髏のように思われた。

- (168) [= (155)] [...] je vous avoue que je ne me suis pas trop informé de quelle manière il plaît à Dieu d'exercer sa justice, quoique, à vous dire vrai, il me semble, **en réfléchissant** sur ce qui se passe dans le monde, que s'il punit dès cette vie, au moins il ne se presse pas.

#### 4.4.5. 暗黙化された経験者・認知主体

この条件は、それ以外の条件が同時にみとめられないものだけを数えてももっとも多く観察されるが、実は他の条件にかぞえ入れた例についても、同時にこの条件もみとめられる事例がほとんどである。たとえば、(169)は非人称構文の条件を兼ねそなえており、(170)は受動的代名動詞の条件を兼ねそなえているため、暗黙化された経験者・認知主体の条件をみたしていながらも、このカテゴリーの例数にふくめていない（暗黙の経験者・認知主体の条件がいかにひろく認められるかを確認するには、4.4.3 節までで既出の例もあわせて参照されたい）。支配節の内容は、いずれの例においても、表現されない認知主体による認知内容を示すものである。

- (169) Il y eut bien encore, **en commençant**, quelque débat entre nous sur la manière dont j'avais besoin moi aussi, d'être aimé.

(Sainte-Beuve, *Volupté*, CT)

初めに（始めるとき）、わたしもまた、どのように愛される必要があるかということについて、われわれの間でまた議論があった。

- (170) Elle [=la migration] est essentielle aussi à un développement futur de ces communautés, développement qui ne se peut se concevoir — en raison même de la politique économique imposée par le FMI — **en faisant** abstraction de l'économie de marché et des dépendances technico-économiques qu'elle entraîne.

(Patrice Deramaix, *L'exil, l'épreuve et le défi*, CT)

人口移動もまた、これらの社会の未来の発展のために緊要である。その発展は、一まさしく、国際通貨基金から課された経済政策のゆえに—人口移動がひきおこす市場経済と、技術的・経済的依存関係をぬきにしては考えられないものである。

- (171) [= (95)] Près de la porte, à gauche **en entrant**, une malle plate décorée de plusieurs étiquettes, sur lesquelles, à midi, se lisaient facilement des noms de Compagnies anglaises de navigation.

- (172) Le remède est facile si la maladie est prise à temps ; **en la laissant** aller, elle deviendra incurable.

(François René de Chateaubriand, *De la presse*, CT)

病気が適時につかまえられるなら、治療はたやすい。それをとりにがすと、病



気は治療不可能になる。

#### 4.4.6. 所有をあらわす表現（所有形容詞、de 前置詞句、関係詞 dont など）

支配節中に所有表現があらわれ、主語不一致をひきおこしている事例は、いずれも、被所有物の動作や状態に仮託して、所有者の反応をメトニミー的に示す表現であるといえる。その際、被所有物・所有者の相違から主語不一致がひきおこされるのである。

- (173) Alors, **en m'approchant** pour l'embrasser, ma main rencontra sa main, sa chère main toute moite des sueurs de l'agonie.

(Alphonse Daudet, *Le Petit Chose*, CT)

そして、彼にキスするために近づいたとき、わたしの手が彼の手、苦惱で汗びっしょりになった彼のいとしい手にふれた。

- (174) Vers onze heures une cavalcade assez nombreuse entra dans Pietranera ; c'étaient le colonel, sa fille, leurs domestiques et leur guide. **En les recevant**, le premier mot de Colomba fut : «Avez-vous vu mon frère ? » (Prosper Mérimée, *Colomba*, CT)

11 時ころ、ずいぶん多くの一団がピエトラネーラに入ってきた。大佐と、かれらの娘、かれらの使用人と案内人であった。かれらを迎えるとき、コロンバの最初のことは、「わたしの弟に会ったか」というものだった。

よりこまかに見てゆくと、所有表現のなかでも感覚器官・思考器官をさす名詞、感覚・感情をさす名詞（ses yeux, son coeur, sa tête ; son émotion, son sentiment, son attention など）が被所有物の位置を占める場合が多い。これらの名詞の意味からして、こうした場合は、なにほどか経験者が表現されるケース（§.4.4.4）と似ているといえる。さらに、(177), (178)のように、文中で経験者の位置にそれらの名詞がくることもある。

- (175) [= (71)] Et mon coeur se fondait en délices **en pensant** aux voluptés que donnerait ce baiser.

- (176) Mon étonnement s'accrut **en voyant** que cette immense énumération se composait seulement des personnes qui se trouvaient dans la salle et dont j'avais vu les images se diviser et se combiner en mille aspects

fugitifs. (Gérard de Nerval, *Aurélia*, CT)

その莫大な列举が、その部屋にいるひとだけからなっていることがわかって、わたしの驚きは高まった。そのひとたちの姿が、つかの間の千もの側面へとわかれたりくみあわさったりするのをわたしは見ていたのだ。

- (177) **En entrant** dans la salle à manger, le spectacle le plus inattendu du frappa mes regards. (Anatole France, *La cravate*, CT)

食堂に入ったとき、もっとも予想外の情景がわたしの視線をおどろかせた。

- (178) **En entrant** dans cette ville, le premier bâtiment qui frappa nos regards fut la forteresse. (Alexandre Okinczyc, *Mémoires*, CT)

その町に入ったとき、われわれの視線をおどろかせた最初の建物は要塞だった。

#### 4.4.7. 所有表現をともなわない身体部分表現など

「定冠詞＋身体部分」などの表現が主語不一致ジェロンディフに対してもつ意味は、前項の所有表現つきの名詞と同様である。

- (179) [= (110)] **En l'écoulant**, toutes les têtes étaient penchées sur les poitrines, toutes les oreilles étaient tendues vers cette voix qui planait, comme la foudre, sous ces voûtes émues.

- (180) **Le coeur** lui battait très fort, **en entrant** dans le petit hôtel de la rue Legendre, cette maison cossue où elle avait grandi et où elle croyait ne plus trouver que des étrangers, tellement l'air lui semblait, autre, glacial. (Emile Zola, *L'Argent*, CT)

ルジャンドル通りの小さなホテルに入るとき、心臓がとても強く打っていた。そこは彼女が育った豪華な家であったが、もはや見知らぬひとたちしか住んでいないだろうと彼女は思っていた。彼女にとって、雰囲気はとてもよそよそしく、凍りつくようであった。

#### 4.4.8. 支配節が c'est... のとき (C'est... que 分裂文をのぞく)

支配節が c'est... (またはその時制・叙法ヴァリエント) のときは、主題位置にジェロンディフがくる場合と、c'est がみちびく属詞位置にジェロンディフがくる場合にわかれ、それらによって意味合いがことなる。

#### 4.4.8.1. 主題位置にジェロンディフがくる場合

主題位置にジェロンディフがくる場合においては、以下の例にみられるように、ジェロンディフ句が、仮定的に、または条件設定的に解釈されることが多い。

- (181) **En prenant** une saison favorable pour passer d'ici aux Indes, **c'est** un voyage de six semaines au plus, et d'autant de temps pour en revenir.

(Bernardin de Saint-Pierre, *Paul et Virginie*, CT)

ここからインドまで行くのに好都合な季節をとらえると、長くて6週間の旅であり、もどってくるにも同じだけの時間がかかる。

- (182) L'échange n'a duré qu'une minute, sur un sujet banal. Sur le moment, je n'y ai prêté aucune attention, mais **en y réfléchissant**, **c'est** inhabituel. (Pierre-Jean Bascuñan, *Demain*, CT)

凡庸な主題について、やりとりは1分しかつづかなかった。そのときは、わたしはそのことになんの注意もむけなかったが、しかし考えてみれば、普通のことではなかった。

#### 4.4.8.2. 属詞位置にジェロンディフがくる場合

一方、属詞位置にジェロンディフがくる場合は、形式的な支配節の主語 *ce* がジェロンディフの主語になりえないので不一致に分類したものの、意味上の支配節はもっと左にあり、*c'est* は状況補語をいわば「言い足し」のようにみちびいているだけなので、この場合だけはほかの主語不一致ジェロンディフとは別扱いしたほうがよいかもしれない<sup>29</sup>。つぎのような例がそれにあたる。

- (183) On protège tant qu'on peut la retraite ; on se bat vigoureusement en reculant, mais **c'est en perdant** encore beaucoup de monde ; et l'on a toujours été surpris que les français aient pu regagner leur camp. (Baudry des Lozières, *Voyage à la Louisiane et sur le continent de l'Amérique septentrionale*, CT)

われわれはできる限り、避難所を護衛する。退却するとき、われわれは力づくで戦ったが、また多くの人を失いながらであった。そして、フランス人たちが駐屯地を奪還することができたことにわれわれはいつも驚いていた。

- (184) [= (100)] L'espace n'est pas signalé, d'où proviennent les mots. Au

détour d'une ligne, quand surgit un élément du cadre, c'est en passant, vite jeté, sa fonction est purement indicative, signalétique.

#### 4.4.9. まとめ

これまでの観察をまとめると、つぎのようなことがいえる。

- ・ (153) で d' としてあげた「暗黙の認知主体」の条件がたいへん広くみとめられ、支配節にみられる条件の典型とみなすことができる。
- ・ 他の条件も、「暗黙の認知主体」の条件と協調しうろ特徴をそなえている。たとえば、非人称構文や受動的代名動詞は、「なる」型の表現であり、感知主体の潜在性とながかりやすい。

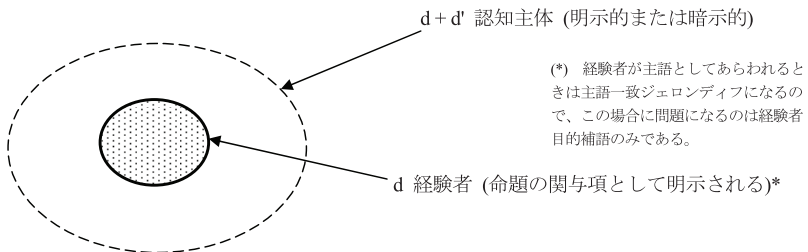
次節では、これらの条件の意味をとらえなおす議論を進めてゆきたい。

### 5. 主語不一致ジェロンディフと視点・認知モード

#### 5.1. 経験者と暗黙の認知主体

前節のまとめでのべたように、(154) の d 「暗黙の認知主体」という条件が主語不一致ジェロンディフを理解するかぎのひとつになるので、ここではその条件についてももう少し詳しく考えてみよう。とりわけ、d 「経験者目的補語」の条件との関係が重要である。その関係は、つぎの (185) の図説によって示される。

(185) 図：「経験者」と「暗黙の認知主体」の関係



d (経験者目的補語) と d' (暗黙の認知主体) の関係は、明示的、暗示的という点で一見逆の性質をもつように思われかねないが、ある意味では d' が d

を包みこむ関係にある。なぜなら、経験者や知覚主体が単に存在している諸事例のなかで、それらが目的補語として明示されるというさらなる条件のつけくわわった諸事例が、部分集合をなしているからである。

さらに、d' は、a, b, c, e, e' の条件と兼ねている例がきわめて多く、もっとも広くみられる条件である。それらのことから、条件 d' は、全体のなかでも、ある程度の典型性を有する条件であると考えられる。

したがって、d, d' をあわせた部分を説明できるなら、主語不一致ジェロンディフのほとんど全体を説明できることになる。その説明は、つぎのようなものになると思われる。経験者、認知主体が潜在し、ジェロンディフ句、支配節にわたって通底している（すなわち、ジェロンディフ句が認知主体の行為をあらわし、支配節が同じ認知主体からみた内容をあらわす、というつながりが文を下ざさえしている）からこそ、主語の同一性という統辞的に明らかな一貫性が欠けても、視点の一貫性を失わずにすむので、発話文としては成立するということである。

## 5.2. I モードと D モード

主語不一致ジェロンディフがふくまれる文が、経験者、ならびに暗黙の認知主体の視点の一貫性によって成り立つと考えることは、とりもなおさず、その視点のありようを問いなおすことになる。こうした問題をとらえるのに好適と思われるのが、中村（2009）による「認知モード」の概念である。

中村（2009）は、Langacker（1985）による「標準的視点構図」（*canonical viewing arrangement*）<sup>30</sup>と、「自己中心的視点構図」（*egocentric viewing arrangement*）の区別を、「見る・見られる」関係に局限される、せまい射程しかもたないものとして批判し、それらを発展的に概念化しなおして、「I モード」（*Interactional mode of cognition*）と「D モード」（*Displaced mode of cognition*）という認知モードの区別を提唱している。

I モードとは、認知主体が対象や環境との「インタラクションを通じて認知像を形成する」（中村 2009, p.359）認知モードのことである。すなわち、認知対象のなかに認知主体がひたりきり、そのまっただ中で認知を行なうしかたである。それに対して、D モードとは、「認知主体としての私たちが、何らかの対象とインタラクトしながら対象を捉えていること（認知像を形成していること）を忘れて、認知の場の外に出て（*displaced*）、認知像を客観的事実として眺めている」（中村 2009, p.363）という認知モードである。中村（2009, p.371）

は、さらに、「日本語・英語はそれぞれ I モード・D モードを反映する言語の典型とみなすことができる」としている。

そして、以上のような中村（2009）の論をうけついで、春木（2011b）は、認知モード論においてフランス語の占める位置について、「フランス語が言語タイプとしては英語に近いのは確かであるが、発話者・発話空間と言語表現との関係においては、実は英語よりもむしろ日本語タイプの言語に近い点も持っている」（*ibidem*, p.61）としている。

たしかに、本稿筆者も渡邊（2012a）で論じたように、日本語、英語がそれぞれ I モード言語、D モード言語として両極端に位置する言語であるのに対し、フランス語には I モード、D モードの点では中間的に感じられる事象が多い。ここでは、それらの事象をくりかえし検討することはしないが、I モード、D モードのちがいが端的にあらわれる例をひとつだけ見ておきたい。それは、川端康成『雪国』の劈頭にあらわれる文(186)と、その英訳(187)、そして仏訳(188)、(189)である。

(186) 国境の長いトンネルを抜けると、雪国であった。(川端康成『雪国』)

(187) The trains came out of the long tunnel into the snow country.

(tr. Edward Seidensticker)

直訳：列車は長いトンネルから出て、雪国へとはいって行った。

(188) Un long tunnel entre les deux régions, et **voici** qu'on était dans le pays de neige. (tr. Bunkichi Fujimori et Armel Guerne)

直訳：ふたつの地方の間の長いトンネル、そしてほらここに、ひとは雪国にいたのだった。

(189) Au sortir du long tunnel de la frontière, on se trouvait au pays de neige. (tr. Cécile Sakai)

直訳：境界の長いトンネルを出て、ひとは雪国にいたのだった。

(186)の文は、上越線の清水トンネルを上州側から越後側へとぬける汽車のなかからみた眺望をのべる、きわめて I モード的な文であるが、(187)の英訳ではその点は一変し、the trains を主語にたてることにより、それを外在的に、いわば神の視点からながめる D モードの文になっている。この翻訳は、英語の D モード性が、ほとんど不可避免的に要請するところであろう。

それに対して、(188)の仏訳は、前半を名詞句のみで処理し、後半を *voici*

(「ほらここに」) では始めるなど、I モード的な臨場感を重視しており、あたかも日本語に寄りそってきているかのように感じられる。また、(188), (189) はいずれも主節で半過去が用いられており、半過去という時制は、事態の内部に視点をおく(入射的視点 *vision incidente*) という意味で I モード的である。さらにいうと、(188), (189) にはいずれも知覚者である *on* が顔を出しているという点ではやや D モード的であるものの、そもそも *on* という代名詞が指示しているのは、潜在的にはだれもが該当しうるような汎人称的な主体であって、主客混淆的な表現であることを考慮に入れるならば、I モード寄りであるといえる<sup>31</sup>。

### 5.3. I モード現象としての主語不一致ジェロンディフ

主語不一致ジェロンディフの典型的な条件「暗黙の認知主体」は、認知主体が表現されず、その主体によって認知されたかぎりでの事態だけがえがき出されるという意味で、すぐれて I モード的な現象である。所有表現、経験者目的補語などで、認知主体が文中に痕跡をのこす場合もあるが、主語一致ジェロンディフの確固たる D モード性にくらべると、やはり I モード傾向の現象である。

主語不一致ジェロンディフの特徴を対比的に明らかにするため、ここでは、主語一致ジェロンディフ(190), (191) と主語不一致ジェロンディフ(192), (193) を比較してみよう。

- (190) **En supposant** qu'après avoir mangé le cuir ils mangent la semelle, je ne vois pas trop ce qui leur restera après, à moins de se manger les uns les autres.

(Alexandre Dumas, *Les Trois Mousquetaires*, CT)

皮を食べたあとには靴底を食べると仮定すれば、わたしは、共食いをすること以外、そのあとに残っていることがあまりわからない。

- (191) Marguerite connaissait si bien son père qu'elle devina le motif de cette tendresse, **en supposant** qu'il pouvait avoir en ville quelques dettes desquelles il voulait s'acquitter avant son départ.

(Balzac, *La recherche de l'Absolu*, CT)

マルグリットは父親のことをよく知っていたので、彼が旅立つまえに返済しておきなかった負債がその町にあるかもしれないと仮定して、かれのやさしさの理由を見抜いた。

- (192) [= (86)] Mais d'abord, **en supposant** que le jeune comte n'ait pas eu le droit de tirer sur du Croisier, il n'y aurait pas imitation de signature.
- (193) [= (87)] M. Leconte de Lisle est la première et l'unique exception que j'ai rencontrée. **En supposant** qu'on en puisse trouver d'autres, il restera, à coup sûr, la plus étonnante et la plus vigoureuse.

(190) では, je ne vois pas trop..., (191) では l'on se tromperait というように, 認知主体が支配節の主語としてあらわれていて, そのことにより, 客観的な認知モードである D モードを一貫して反映する文になっている。それとの比較においても, 支配節に認知主体の明確な位置のない(191), (192)の文は I モードを反映する文になっているといえる。

また, 典型的な I モード言語である日本語との対照も, 主語不一致ジェロンディフの I モード性を傍証する現象と見なすことができる。実際, 主語不一致ジェロンディフのふくまれる文を, I モード言語である日本語に直訳した文(194')~(196')には, なんの変則性も感じられず, むしろ積極的に自然な文である。

- (194) [= (3)] Le bonheur s'obtient **en n'y pensant pas**.
- (194') 幸せは, 幸せを考えないでいると得られる。
- (195) [= (4)] Sur la gauche, **en remontant** la rue, juste après un autre bar qui fait angle avec le quai, se dresse un hôtel de trois étages [...]
- (195') 通りをさかのぼってゆくと, 左手に, 川岸にむかう角にあるもう一軒のバーのすぐ後に, 4 階建てのホテルがそびえている。
- (196) [= (5)] Au Prado, on s'est séparés à l'entrée pour voir les salles chacun de son côté. **En le retrouvant** à la sortie dans les jardins, il était avec un homme, il s'était fait alpaguer par un pédophile
- (196') プラド美術館で, ぼくたちは入口でわかれ, それぞれに展示室を見に行くことにした。庭園への出口で彼とまた落ちあうと, 彼はひとりの男といた。少年愛者に言いよられていたのだ。



以上のことから、主語不一致ジェロンディフは、基本的に I モードの現象であるといえる。

## 6. おわりに

以上、本稿では、コーパス調査にもとづいて、主語不一致ジェロンディフについて考察してきた。本稿での考察をまとめると、つぎのようになるであろう。

- ・一般的に、主語不一致ジェロンディフの、ジェロンディフ句によって示されるのは認知主体の行為であり、支配節によって示されるのは認知対象となる事態である。
- ・不一致用法の場合、認知主体はジェロンディフ句で示される行為を比較的積極的におこなう。つまり、ジェロンディフにおかれる動詞は動作主性・意思性の高い動詞が来やすい。
- ・支配節の表現のなかには、典型的には認知主体の占める位置はない（それがあっても、経験者目的補語、所有表現などで、側面的にしか事態にかかわらない形である）。
- ・したがって、主語不一致ジェロンディフのふくまれる文全体としては、「I モード」の現象をなしている。

しかし、「I モード」を、すくなくとも同様に適用することでは説明しがたい例外的な文も、ごく少数ながらあったので、最後にそれらを見ておきたい。これまで述べてきた適用のしかたでの「I モード」の概念に明確に反すると確認できたのは、主語不一致ジェロンディフ 1483 例のなかで、以下に見る 2 例のみであった。これらについては順次それぞれについてのべるような個別事情がみつめられるが、いまのところ統一的な説明を確定するにはいたっていない。

(197) Et **en disant** ces mots, la voilà fondant en pleurs et suffoquée par ses sanglots.

(Denis Diderot, *Jacques le fataliste et son maître*, CT)

それらのことばを言いながら、ほら、彼女は泣きだし、すすり泣きにむせている [「彼女」は直接目的補語]。

(197)においては、voilà はジェロンディフの主語である彼女からみると「外の視点」であり、「I モード」とはいいがたい。あえていえば、la voilà という主体による観察が一貫しており、ジェロンディフ句も（認知主体の行動ではなく）認知される内容の一角をなしているのである。

ただし、voilà が voir に由来することを想起すると、la voilà 以下を一種の知覚構文と解釈することもでき、< la - fondant en pleurs... > の部分を二次的叙述とみなして、ジェロンディフ句 en disant ces mots が意味的にはそちらにかかっているという解釈も可能である<sup>32</sup>。そのような解釈がゆるされるなら、この例も主語一致ジェロンディフに回収できることになる。しかし、voilà がつねに二次的叙述をとまなうわけではなく、voilà が名詞句のみをみちびいているときにも主語不一致ジェロンディフは出現する。それらもふくめて voilà に関する扱いを統一しておくために、本稿での分類は変更しないこととしたい。

- (198) — Je suis bien destiné au malheur de ne vous pas entendre, reprit Consalve, puisque, même **en me parlant** espagnol, je ne sais ce que vous me dites.

(Comtesse de La Fayette, *Romans et nouvelles*, CT)

「わたしはまさに、あなたのお話を聞けないという不幸な運命にあるのです」とコンサルヴはくりかえした。「たとえわたしにスペイン語でお話しくださっても、わたしはあなたのおっしゃることがわかりません」

(198)においては、ジェロンディフ句のほうが認知主体からみて外的事行になっており、支配節が認知主体のおかれている状態であるので、典型的な主語不一致の例における視点の布置とくらべるなら、ジェロンディフ句と支配節のとの視点が逆転したかたちの不一致であるといえる。

この例に関しては、ジェロンディフ句 en me parlant espagnol が、直接隣接する支配節 je ne sais pas... を飛びこえて、文末の関係節中の vous me dites「あなたがわたしに言う（こと）」にかかわると考えれば通例的な一致用法になる<sup>33</sup>。それもたしかに、ジェロンディフ句 en me parlant espagnol の生起を助ける文脈的要因にはなっているかもしれないが、ジェロンディフ句が仮定をあらわし、支配節が帰結をあらわすという意味的な構造にてらすと、「話してもらっても ⇒ わたしはわからない」のであって、「話してもらっても ⇒

あなたが言う (?)」というわけではないので、ジェロンディフ句が関係節内の深い位置にある *vous me dites* にかかるという解釈は、一致・不一致を判定するための基礎となる解釈としては採用しがたい。

ところで、これらの事例を統合するべく、たとえば、「主語不一致ジェロンディフには、なんらかのかたちで I モードが関与していればよい」というところまで仮説をひろげることも考えられるかもしれない。しかしその方策は、あまり適切とは思えない。ジェロンディフ句が認知主体の行為や状態をあらわし、支配節が認知主体による認知内容をあらわす例が圧倒的多数を占めており、そのパターンが圧倒的に生産性が高いからである。むしろ、本稿で主語不一致ジェロンディフの基本的な視点構造として指摘した図式をプロトタイプとして保持しておいて、(197)、(198)のような特異な例を、それぞれにプロトタイプからの部分的な偏差をもつ、きわめて周辺的な事例とみなしたほうがよいのではなかろうか。

一方、おなじ論理をジェロンディフの用法全体に適用するならば、そもそも主語不一致ジェロンディフが 4.2% の例外的事例であることから、まず主語一致ジェロンディフをプロトタイプとみなしたうえで、不一致ジェロンディフは一致ジェロンディフからの拡張事例として説明せよ、ということになりかねない。しかし、それもまた、かならずしも適切とは思えない。この問題に関しては、ジェロンディフは全般にそれが使われる文、または談話のなかで視点が一貫していることを要求しており、その要求が((190)~(193)の例で確認したように) D モード的な視点によって満たされるか、I モード的な視点によって満たされるかに応じて、それぞれ主語一致ジェロンディフ、主語不一致ジェロンディフの事例が出てくるといように考えるのが穏当であろう。

## 註

- 1 この論文は、2008 年度～2012 年度科学研究費補助金（基盤研究(C)）課題番号 20520348「フランス語および日本語におけるモダリティの意味論的研究」（研究代表者渡邊淳也）、2012～2013 年度科学研究費助成基金（基盤研究(C)）課題番号 24520530「日英語ならびに西欧諸語における時制・モダリティ・アスペクトの包括的研究」（研究代表者和田尚明）、ならびに 2013 年度科学研究費助成基金（基盤研究(C)）課題番号 25370422「フランス語および日本語におけるモダリティの発展的研究」（研究代表者渡邊淳也）の助成をうけて行なわれた研究の成果の一部である。また、この論文の内容は、日本フランス語学会第 284 回例会（2013 年 4 月 20 日、於跡見学園女子大学）、および Colloque International *La transgression : de l'émancipation à la progression*（2013 年 9 月 30 日～10

月3日、於 Université catholique de l'Ouest (Angers)) にて本稿筆者がおこなった口頭発表にもとづいている。ただし、第2の発表以前に本稿を執筆したため、そのときにいただいたコメントや、その後の考察は本稿には反映できていない。きわめて啓発的な諸論文、ならびに個人的交流によって、わたしをこの研究へとみちびいてくださった早瀬尚子さん、内容に対して貴重なコメントをくださった古川直世先生、川口順二先生、春木仁孝先生、阿部宏先生、中尾浩先生、山根祐佳さん、中尾和美さん、大久保朝憲さん、川島浩一郎さん、和田尚明さん、木田剛さん、喜田浩平さん、金子真さん、酒井智宏さん、守田貴弘さんに深甚の謝意を申し添えたい。いうまでもなく、なお指摘されうる問題点はすべて本稿筆者に帰せられるべきものである。

- 2 単に「ジェロンディフ」(gérondif)というときは、< en + 現在分詞 > の部分のみをさすものとする。それに対して、「ジェロンディフ句」(syntagme gérondif または syntagme gérondival) というときは、ジェロンディフにおかれた動詞が目的補語、状況補語や属辞をしたがえて形成する連辞全体をさす。たとえば、(3)の例に即していうと、en écoutant がジェロンディフで、en écoutant ses paroles がジェロンディフ句である。
- 3 英語学では、現在分詞の同様の用法に「懸垂分詞」(dangling particle) という簡潔な名称があたえられているのに対して、フランス語学では、同様の用語が確立していない。Halmøy (2003, pp.119, 120 *et passim*) は、la non-corréférence という、多少ぼかした略記をしているが、もちろんこの言い方はいきなりは使えない。
- 4 結論部で日本語との比較もおこなうので、例文には本稿筆者による日本語訳をつけている。ただし、主語不一致ジェロンディフであることをはっきり示すため、とくに「直訳」とことわっていなくても、訳文だけを読んだ場合の不自然さをしので、あえて直訳的な日本語にしている場合がある。
- 5 Chevalier *et alii* (1988<sup>2</sup>) はジェロンディフ以外にも同列に論じているので、省略箇所には他の形式がふくまれている。
- 6 木内 (2005, pp.44-45) によると、関係文法の理論上のこの扱いは、表層の主語に「主語性」が欠如しているという事実によって裏づけられる。主語性の欠如をあらわす事例としてあげられるのは、第1に、(i)のような経験者間接目的補語をもつ文から、(ii)のような非人称受動文が作れないことである。

(i) Les femmes plaisent à Pierre. (*ibidem*, p.44) 女性たちがピエールに気に入る。

(ii) \* Il a été plu aux femmes (de / par Pierre). (*ad loc.*)

そして第2に、主語に on をとる場合の解釈の制約がある。on は不定代名詞として quelqu'un と同様に解釈される場合と、定代名詞として nous と同様に解釈される場合があるが、双方の解釈を許す通常他動詞(iii)とちがって、経験者間接目的補語をとる動詞の場合は、(iv)のように、on を nous と同様に解釈するしかない。

(iii) On critique beaucoup le nouveau gouvernement. (on : nous / quelqu'un)  
(*ibidem*, pp.44-45)

ひと [= われわれ / だれか] は新しい政府を多く批判している。

(iv) On a plu au directeur. (on : nous / ?quelqu'un) (*ibidem*, p.45)

ひと [= われわれ / ? だれか] は部長に気にいった。

- 7 (37)の中だけでは、「どの層で」主語位置を占めればよいのかは明記されていないが、そのあとの地の文では、*« [...] a nominal which heads a 1-arc at some level can be a possible controller of an en clause. »* (Legendre 1989, p.779, 下線引用者) と書かれており、いずれかの層で主語位置を占めればよいという、ゆるやかな条件であることがわかる。
- 8 これらの例を見て気づくことは、(43)のように曖昧性のあるケースでも、(42)のように最終層の主語のひとつとりに決まるケースでも、最終層の主語がジェロンディフを統率しうる場合として Legendre があげている例が、いずれも ((42), (43) 以外も) ジェロンディフのまえに副詞 *tout* が先立っているということである。ジェロンディフのまえに副詞 *tout* をおくと、原則としては、ロドリゲス (2006) が指摘するように、主節の事態とジェロンディフ句の事態が同一主体によってになわれることになるので、関係文法のいう最終層の主語がジェロンディフを統率するようになる。このことは、裏をかえせば、*tout* のような強力なマーカーの助けがなければ、経験者間接目的補語をもつ文は、(41)のように、経験者がジェロンディフを統率する解釈がなされやすい、ということではなからうか。
- 9 3.4 節で見る批判のほか、より根柢的な問題として、酒井智宏さん (2012 年 9 月 17 日づけ私信) が、関係文法はつぎのような手順をふむ「循環論」であるという指摘をくださった。
  - 「1. 文法関係  $\alpha$  に関して、かつ  $\alpha$  に関してのみ一般原則 P が成り立つようにしたい。
  2.  $\alpha$  でない要素  $x$  に関して P が成り立っているように見える現象が見つかった。
  3.  $x$  が  $\alpha$  であるような層を含む派生を考える。」
 たしかに、最終層以外の層 (あるとすれば) の布置を知る手だてが、当の説明対象のはずの統辞現象しかないので、循環論法にならざるを得ない。この問題点は、関係文法のみならず、多くの言語理論に対して提起されうと考えられる。
- 10 « Corpatext 1.02 » は、18 世紀から 20 世紀までの文学作品やジャーナリスティックな文を中心とする、約 2700 件の原典から集積された、約 3700 万語からなるコーパスであり、インターネット上に無償で公開されている。<http://www.lexique.org/public/lisezmoi.corpatext.htm> からダウンロードでき、手もとで自由に使用できる。Corpatext についてご教示くださった藤村逸子先生、利用に際して技術的に留意すべき点をご教示くださった中尾浩先生に感謝を申しそえた。
- 11 使用頻度が高いと推断するために、仏和辞典 4 冊 (『新スタンダード』, 『プチロワイヤル』, 『クラウン』, 『ディコ』) における最重要語の標示を参考にした。ただし、動詞語彙全体としての使用頻度が高いと推断されるだけであって、ジェロンディフ形にかぎった場合には、このあと 4.2 節で提示してゆく調査結果からもわかるとおり、たとえば *en ayant*, *en étant*, *en habitant* のように、動詞としての重要度のわりに使用頻度が低いものもある一方で、逆に、たとえば *en disant*,

- en passant のように、とりわけジェロンディフでの使用頻度が高いものもある。
- 12 これ以降、Corpatext からの引用例には、出典標示の末尾に略号 CT を付する。なお、本論文のこれ以降の部分では Corpatext からの引用例とそうでないものがまじっているが、これ以前の部分には Corpatext からの引用例はない。
- 13 春木 (2011 a, p.117) も、やはりひとをあらわす主語と無生物主語との扱いが同様であることをフランス語の特徴とみなしたうえで、その理由をフォースダイナミクスの考えかたを援用して考察し、「[...] フランス語の特徴は、主語を変化する主体としてではなく、あくまでも変化を引き起こすエネルギーの源として捉えているということである。この性格が、他動詞構文・自動詞構文の別なく無生物主語を、本来人間を主語に取る動詞にも使えることの基盤となっているのである」と指摘している。
- 14 ここでは、ジェロンディフ句 en attendant に「待つ」という意味があることを確認するために例文をやや長めに引用しておいた。4.3.4 節でも少しふれるように、en attendant の文法化によって「待つ」という意味が薄れる事例もある。
- 15 もちろん、(67) の解釈として優勢なのは、建物が装飾される様子を知覚し概念化する主体が「待っている」という解釈であって、主語一致解釈ではない。しかしながら、本調査では、主語不一致解釈の事例の認定をあえてきびしくすることにより、曖昧性を排除し、確実に不一致解釈とみなせる事例のみを扱うこととする。
- 16 次節でみるように、全体では 1 動詞あたりのジェロンディフの総生起 288 であるのに対し、状態動詞では 98 しかなく、5 つの動詞類型中最少である。そのことから考えると、ジェロンディフにおかれる頻度の低さは、avoir, être にかぎらず、状態動詞全般の特徴であるといえる。
- 17 また、tout がつかない例でも、つぎのように、譲歩的に解釈できる例が多かった。  
 (i) Mais comment peut-on admettre que la culture se soit développée **en étant** dissociée ou isolée des autres domaines ?  
 (Enver Hoxha, *Réflexions sur la Chine*, CT)
- しかし、ほかの領域から切り離されたり、孤立しているにもかかわらず、文化が発達したとどうして認めることができるだろうか。
- 18 「... を勘定に入れると」の意味の en comptant... は、そうした註釈が必要な独特のかぞえ方を示しているので、「ジェロンディフが可変的的定位をあらわす」とした渡邊 (2011 b, pp.157-159) の仮説に合致する。
- 19 支配節が après ? しかないという、めずらしい例である。
- 20 ジェロンディフ句中の直接目的補語代名詞 la が支配節の主語 la distribution と同一指示のため、主語不一致ジェロンディフになっている。
- 21 この例は je ferais などの主節省略とも考えられるので「一致独立」とし、統計上は不一致には入れていない。
- 22 soit dit en passant に関しては、主語一致、不一致をとりまぜて、disons-le en passant<sup>[11]</sup>, pour le dire en passant<sup>[12]</sup>, cela soit dit en passant<sup>[9]</sup> など、成句化のさまざまな段階と考えられるヴァリエントが観察できた。それらについては別の機会に論じたい。
- 23 このような例をみると、一部の先行研究で「tout が先立つジェロンディフはか



- ならず主語一致である」といわれているのは、厳密には誤りであることがわかる。
- 24 entendre は「聞く（聞こえる）」、「理解する」、「意図する」などの意味があり、多義的な動詞であるが、たいへん不思議なことに、ジェロンディフになると聴覚的意味の例しかみあたらない。裸現在分詞については、たとえばつぎのように、「理解する」という意味の例もある。
- (i) Les tragédies et tragi-comédies seraient du pur hébreu pour ces rustiques ignorants de l'histoire et de la fable, et n'**entendant** pas même le beau langage français. (Théophile Gautier, *Le Capitaine Fracasse*, CT)
- 物語や寓話を知らず、うつくしいフランス語さえも**理解**しない田舎者には、悲劇や悲喜劇はまったくのヘブライ語（ちんぷんかんぷん）だろう。
- 25 註 24 で確認した entendre に関する事情とことなり、en voyant に関しては、少数ながら視覚的意味に限定されないジェロンディフの用例もある。
- 26 en attendant の文法化は、それだけでも大きな問題であるので、機会をあらためていっそう詳細に論じたい。当面は (en attendant !), Vigier (2012) を参照。
- 27 春木 (2012 a, pp.58-62) では代名動詞受動用法と自発用法との連続性や共存が指摘されており、春木 (2012 b, pp.51-57) では受動用法が認知主体と対象とのインタラクションをあらわすことが論じられており、いずれも本研究とおなじ方向性での議論である。
- 28 sembler, paraître とともに用いられる経験者間接目的補語については、渡邊 (2004) を参照。
- 29 この種の例では c'est 以下のジェロンディフが焦点化されているため、たとえば (183) を C'est **en perdant** encore beaucoup de monde qu'on se bat vigoureusement en reculant. のように分裂文で言い換えることができる。4.1 節でのべたように、分裂文の場合は、c'est...que をとりはらって考え、ce を主節とは考えないとした本稿の分類方法を想起すると、ここでも c'est を支配節とはみなさず、本当の意味での主語不一致ジェロンディフとは考えないほうがよいかもしれない。C'est の属詞位置にジェロンディフがくる場合をほかの主語不一致ジェロンディフと別扱いしたほうがよいという考察は当初より本稿筆者が示していたが、分裂文との並行性に関しては、日本フランス語学会第 284 回例会の席上で山根祐佳さんからいただいたご指摘に負っている。しるして感謝申し上げたい。
- 30 Langacker (1985) では「最適の視点構図」(*optimal viewing arrangement*) という用語が「標準的視点構図」とならんで使われているが、ここでは中村 (2009) にならって「標準的」という用語をとりあげている。
- 31 2013 年 3 月 18 日、岡山大学文学部で開催された講演会とシンポジウム「ことばと外界認知」の席上で、金子真さんが本稿筆者の講演に対して、貴重なコメントをくださったので、書誌的情報と例文番号のみ変更して、以下に引用させていただきます。

「本多 (2009, §.2) で、他者理解に関する説明として、(i) 心の理論仮説、(ii) シミュレーション仮説、の対立があるとされています。(ii) のシミュレーション仮説は、話者が他人の立場に同化する一人称的理解の仕方であり、(i) の「心の理論仮説」は、「人は、これこれの状況に置かれると、一般にこのように考え、感じるだろう」というある種の法則・理論を心の中に作っておいて、それをここ

の場面に応用するという3人称的（あるいは汎人称的）理解の仕方だそうです。本多論文ではさらに、他者理解だけでなく、事態理解に関しても、(i) 心の理論仮説、(ii) シミュレーション仮説が応用できることを示唆しています。この観点からすると、半過去の場合は、渡邊（2012, p.224）で書かれているように「別の誰か」「二次的主体」を必要とすることからすると、確かにIモード的であるとしても、話者が自己を投影して1人称的に状況とインターアクションをおこなうというよりは、「心の理論」に基づく汎人称的インターアクションであるように思われます。そうすると、[本稿（186）]の日本語の例だと、現在の自己を過去に投影してその時の状況とインターアクションを行う（ように描写する）のに対して、[本稿（188）、（189）]の仏訳の例では、人称の区別がない一般的な主体（onであらわされる）として状況とのインターアクションをおこなうというように、少し性格が違うのかもしれませんが」

たしかに、Iモードにおいて事態を認知する主体がどのようにとらえられるかによって、日本語の場合は1人称的・シミュレーション的、フランス語の場合は汎人称的・心の理論的というように、Iモードのなかでもさらにこまかな区別ができるかもしれない。

- 32 日本フランス語学会第284回例会の席上での酒井智宏さんのご指摘による。  
 33 日本フランス語学会第284回例会の席上での川口順二先生のご指摘による。なお、同例会発表では、(197)、(198)と同列に、つぎの例もあげて、

(i) Vous vous souvenez de l'air de Monsieur, hier **en nous quittant** ?

(Denon, *Point de Lendemain*, CT)

きのう、われわれと別れるときの / われわれが別れるときの、あの人の様子をおぼえていますか。

ここでは、quitterしたのはvousではなくMonsieurであり、(198)と同様、ジェロンディフ句のほうが認知主体からみて外的な事行であるとする解釈を示したが、川口順二先生から、「en nous quittantのnousは、発話者も対話者もMonsieurもふくむ全員をさす再帰代名詞で、この例は相互的代名動詞se quitterの例ではないか」というご指摘をいただいた。コーパスで例文の前後も確認したところ、たしかにそのような解釈のほうが自然であると考えられるので、この例についてはen quittantの例としては扱わないことにした。4.2節以降で示す本稿の統計も修正済みのものである。

## 参考文献

- Arnavielle, T. (1998) : *Le morphème -ant : unité et diversité*, Peeters.  
 Arnavielle, T. (2003) : « Le participe, les formes en -ant : positions et propositions », *Langages*, 149, pp.37-54.  
 Barceló G. J. et J. Bres (2006) : *Les temps de l'indicatif en français*, Ophrys.  
 Bonnard, H. (1987-1988) : *Grand Larousse de la Langue Française*, Larousse.  
 Bonnard, H. (2001) : *Les trois logiques de la grammaire française*, Duculot.  
 Cellard, J. (1996) : *Le subjonctif*, Duculot.  
 Chevalier, J.Cl. et alii (1988, 2<sup>ème</sup> éd.) : *Grammaire de français contemporain*,



Larousse.

- Combettes, B. (2003) : « L'évolution de la forme *-ant*, aspects syntaxiques et textuels », *Langages*, 149, pp.6-24.
- Cosme, Chr. (2008) : « A corpus-based perspective on clause linking patterns in English, French and Dutch », C. Fabricius-Hansen et W. Ramm (éds.) : *'Subordination' versus 'coordination' in sentence and text*, John Benjamins, pp.89-114.
- De Carvalho, P. (2003) : « « Gérondif », « participe présent » et « adjectif déverbal » en *-ant* en morphosyntaxe comparative », *Langages*, 149, pp.100-126.
- Desclés, J.-P. (1995) : « Les référentiels temporels pour le temps linguistique », *Modèles linguistiques*, 32, pp.9-36.
- Fasciolo, M. (2007) : « Le gérondif simple en italien », *Cahiers Chronos*, 19, pp.127-144.
- Franckel, J.-J.(1989) : *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Droz.
- Franckel, J.-J.et D. Lebaud (1991) : « Diversité des valeurs et invariance du fonctionnement de *en* préposition et préverbe », *Langue française*, 91, pp.56-79.
- Frei, H. (1929, rééd. 2011) : *La grammaire des fautes*, Presses universitaires de Rennes.
- Gettrup, H. (1977) : « Le gérondif, le participe présent et la notion de repère temporel », *Revue romane*, 12, 2, pp.211-271.
- Gougenheim, G. (1950) : « Valeur fonctionnelle et valeur intrinsèque de la préposition *en* en français moderne », *Grammaire et psychologie, (Journal de psychologie, numéro spécial)*, pp.180-192.
- Grevisse, M. (1993, 13<sup>ème</sup> éd.) : *Le bon usage*, Duculot.
- Guillaume, G. (1919, rééd. 1975) : *Le problème de l'article et sa solution dans la langue française*, Hachette.
- Guillaume, G. (1929, rééd. 1970) : *Temps et verbe*, Honoré Champion.
- Halmøy, J. O. (2003) : *Le gérondif en français*, Ophrys.
- Halmøy, J. O. (2006) : « Présence du participe dit « présent » dans la presse », G. Engwall (éd.) *Construction, acquisition et communication*, Université de Stockholm, pp.203-216.
- Halmøy, J. O. (2008) : « Les formes verbales en *-ant* et la prédication seconde », *Travaux de linguistique*, 57, pp.43-62.
- Haspelmath, M. (1995) : « The converb as a cross-linguistically valid category », Haspelmath et König (éds.), pp.1-55.
- Haspelmath, M. et E. König (éds.) (1995) : *Converbs in cross-linguistic perspective*, Mouton de Gruyter.
- Henrichsen, A. J. (1967) : « Quelques remarques sur l'emploi des formes verbales en *-ant* en français moderne », *Revue romane*, 2, 2, pp.97-107.
- Herslund, M. (2000) : « Le participe présent comme co-verbe », *Langue française*, 127, pp.86-94.
- Herslund, M. (2006) : « Le gérondif — une anaphore verbale », M. Riegel et alii

- (éds.), *Aux carrefours du sens*, Peeters, pp.379-390.
- Hayase, N. (1997) : « The role of figure, ground, and coercion in aspectual interpretation », Verspoor, M. et alii (éds.) : *Lexical and Syntactical Constructions and the Construction of the Meaning*, John Benjamins, pp.33-50.
- 早瀬尚子 (2002) : 『英語構文のカテゴリー形成—認知言語学の視点から』 勁草書房.
- 早瀬尚子 (2007) : 「英語懸垂分詞における「主観的」視点」川上誓作・谷口一美 (éds.) : 『ことばと視点』 英宝社, pp.77-90.
- 早瀬尚子 (2009) : 「懸垂分詞構文を動機づける「内」の視点」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (éds.) : 『「内」と「外」の言語学』 開拓社, pp.55-97.
- Hayase, N. (2011) : « The cognitive motivation for the use of dangling participles in English », Kl.-U. Panther et G. Radden (éds.) : *Motivation in Grammar and the Lexicon*, John Benjamins, pp.89-106.
- 春木仁孝 (1991) : 「ジェロンディフ—現在分詞との比較—」 *Gallia* (大阪大学), 31, pp.12-21.
- 春木仁孝 (2000) : 「J'ai rencontré un réfugié qui arrivait du Kosovo. —半過去の属性付与機能について—」『フランス語フランス文学研究』 77, pp.84-96.
- 春木仁孝 (2011 a) : 「生物主語から無生物主語へ—日仏対照研究—」『言語文化研究』 (大阪大学言語文化研究科) 37, pp.99-119.
- 春木仁孝 (2011 b) : 「フランス語の認知モードについて」『言語における時空をめぐる』 (大阪大学言語文化研究科) 9, pp.61-70.
- 春木仁孝 (2012 a) : 「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』 (大阪大学言語文化研究科) 38, pp.45-65.
- 春木仁孝 (2012 b) : 「英仏両言語における中間構文の違いについて」『時空と認知の言語学』 (大阪大学言語文化研究科) 1, pp.49- 58.
- Homma, Y. (2011) : « Principes de fonctionnement de la préposition *en* et absence d'article dans son régime », *Langue française*, 171, pp.77-88.
- 本多啓 (2009) : 「他者理解における「内」と「外」」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (éds.) : 『「内」と「外」の言語学』 開拓社, pp.55-97.
- Høyer, A.-G. (2003) : *L'emploi du participe présent en fonction d'attribut libre et la question de la concurrence avec le gérondif*, Mémoire de DEA, Université de Bergen.
- 池上嘉彦 (1981) : 『「する」と「なる」の言語学』 大修館書店.
- Imbs, P. (1960) : *L'emploi des temps verbaux en français moderne*, Klincksieck.
- Killie, Kr. et T. Swan (2009) : « The grammaticalization and subjectification of adverbial -ing clauses (converb clauses) in English », *English Language and Linguistics* 13, 3, pp.337-363.
- Kindt, S. (1999) : « *En pleurs* vs. *en pleurant* : deux analyses irrécconciliables? », *Travaux de linguistique*, 38, pp.109-118.
- Kindt, S. (2003) : « Le participe présent en emploi adnominal comme prétendu équivalent de la relative en *qui* », *Langages*, 149, pp.55-70.
- 木内良行 (1992) : 「ジェロンディフ等の副詞句における明示されない主語の解釈について」『フランス語学研究』 26, pp.68-76.

- 木内良行 (1998) : 「ジェロンディフ等の副詞句における明示されない主語の解釈について・再考」『フランス語学研究』32, pp.23-27.
- 木内良行 (2005) : 『フランス語の統語論研究』勁草書房.
- Kleiber, G. (2007) : « En passant par le gérondif avec mes (gros) sabots », *Cahiers Chronos*, 19, pp.93-125.
- Kleiber, G. (2008) : « Le gérondif : de la phrase au texte », O. Bertrand et alii (éds) : *Discours, diachronie, stylistique du français : Etudes en hommage à Bernard Combettes*, Peter Lang, pp.107-123.
- Kleiber, G. (2009) : « Gérondif et relations de cohérence : le cas de la relation de Cause », *Recherches ACLIF : Actes du Séminaire de Didactique Universitaire*, 6, pp.9-24.
- Kleiber, G. (2011) : « Gérondif et manière », *Langue française*, 171, pp.117-134.
- Kleiber, G. et A. Theissen (2006) : « Le gérondif comme marqueur de cohésion et de cohérence », F. Calas (éd.) : *Cohérence et discours*, Presses de l'Université Paris-Sorbonne, pp.173-184.
- Kortmann, B. (1991) : *Free adjuncts and absolutes in English*, Routledge.
- Langacker, R. (1985) : « Observations and Speculations on Subjectivity », J. Haiman (éd.) : *Iconicity in Syntax*, John Benjamins, pp.109-150.
- Larreya, P. (2005) : « Sur les emplois de la périphrase *aller + infinitif* », H. B.-Z. Shyldkrot & N. Le Querler (dir.) : *Les périphrases verbales*, John Benjamins, pp. 337-360.
- Le Bidois, G. et R. Le Bidois (1967) : *Syntaxe du français moderne*, 2 vols., Picard.
- Legendre, G. (1989) : « Inversion with certain French experienter verbs », *Langages*, 65, 4, pp.752-782.
- Legendre, G. (1990) : « French Impersonal Constructions », *Natural Language and Linguistic Theory*, 8, 1., pp.81-128.
- Legendre, G. (1994) : *Topics in French Syntax*. Garland.
- Le Goffic, P. (1993) : *Grammaire de la phrase française*, Hachette.
- Le Goffic, P. (1995) : « La double incomplétude de l'imparfait », *Modèles linguistiques*, 31, pp.133-148.
- Lemaréchal, A. (1997) : « Séries verbales et prépositions : incorporation et décurmul des relations », *Faits de langues*, 9, pp.109-118.
- Lipsky, A. (2003) : « Pour une description sémantique et morpho-syntaxique du participe français et allemand », *Langages*, 149, pp.71-85.
- Martinon, Ph. (1927) : *Comment on parle en français*, Larousse.
- 目黒士門 (2000) : 『現代フランス広文典』白水社.
- Mélis, L. (1983) : *Les circonstants et la phrase*, Presses universitaires de Louvain.
- 中村芳久 (2009) : 「認知モードの射程」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (éds.) : 『「内」と「外」の言語学』開拓社, pp.353-393.
- 西村牧夫 (1991) : 「線形性と連続／非・連続—現在分詞とジェロンディフの場合—」『西南学院大学フランス語フランス文学論集』26, pp.105-176.
- 西村牧夫 (2011) : 『中級フランス語 よみとく文法』白水社 (第2章「分詞構文とジェ

ロンディフの徹底検証」).

Novakova, I. (2001) : *Sémantique du futur*, L'Harmattan.

Oguma, K. (2000) : « Préposition *en*: contraintes et hypothèse », 『西南学院大学フランス語フランス文学論集』 40, pp.85-113.

大久保伸子 (2007) : 「Je t'attendais 型の半過去の表現特性と非自立性について」『フランス語学研究』 41, pp.1-15.

大橋保夫ほか (1993) : 『フランス語とはどういう言語か』 駿河台出版社.

Postal, P. M. (1986) : *Studies of Passive Clauses*, State University of New York Press.

Reichler-Béguelin, M.-J. (1995) : « Les problèmes d'emploi du gérondif et des participiales en français contemporain », K. Zaleska et A. Cataldi (éds.) : *Le Français Langue Etrangère à l'Université : théorie et pratique*, Uniwersytet Warszawski, Instytut Romanistyki, pp.243-260..

Riegel, M. et alii (1994) : *Grammaire méthodique du français*, P.U.F.

Rihs, A. (2009) : « Gérondif, participe présent et expression de la cause », *Nouveaux Cahiers de Linguistique Française*, 29, pp.197-214.

Rihs, A. (2010) : « Gérondif et participe présent : la simultanéité comme critère discriminant », in C. Vet et alii (éds.) : *Interpréter les temps verbaux*, Peter Lang.

クロード・ロベルジュほか (1983) : 『現代フランス語前置詞活用辞典』 大修館書店.

ノエル・ロドリゲス (2006) : 「フランス語のジェロンディフの機能と解釈について」『筑波大学フランス語フランス文学論集』 21, pp.101-127.

ノエル・ロドリゲス (2007) : 「フランス語のジェロンディフについてー「ながら」節との比較考察ー」『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』 16, pp.289-302.

阪上り子 (2010) : 「ジェロンディフの時・アスペクト価値」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』 2, pp. 29-46.

阪上り子 (2012) : 「ジェロンディフの統辞的機能」『金沢大学歴史言語文化学系論集 言語・文学篇』 4, pp.37-54.

坂原茂 (1985-1986) : 「関係文法とフランス語(1)～(20)」『ふらんす』(白水社) 1985年2月号から1986年9月号まで連載.

佐藤房吉・大木健・佐藤正明 (1991) : 『詳解フランス文典』 駿河台出版社.

Schrott, A. (2001) : « Le futur périphrastique et l'allure extraordinaire », *Cahiers Chronos*, 8, pp. 159-170.

Shapira, Ch. (2003) : « Préposition et conjonction ? : le cas de *avec* », *Travaux de linguistique*, 44, pp.89-100.

Squartini, M. (1998) : *Verbal Periphrases in Romance : Aspect, Actionality, and Grammaticalization*, Mouton de Gruyter.

Sten, H. (1952) : *Les temps du verbe fini (indicatif) en français moderne*, Munksgaard.

鷺見洋一 (2003) : 『翻訳仏文法』 上巻, 筑摩書房 (ちくま学芸文庫).

武本雅嗣 (2004) : 「ジェロンディフ構文の形式と意味」『仏語仏文学』(関西大学),

- 31, pp.125-143.
- 武本雅嗣 (2011): 「英語の統合型現在分詞に対応するフランス語の非定型動詞について」『時制とその周辺領域の発展的研究』(科学研究費補助金 基盤研究(C) 課題番号 20520441 研究成果報告書), pp.61-70.
- Talmy, L. (1978): « Figure and Groud in Complex Sentences », J. H. Greenberg (éd.): *Universals in Cognitive Linguistics*, Stanford University Press, vol.4, pp.627-649.
- 田中善英 (2006): 『フランス語における複合時制の文法』 早美出版社.
- Togby, K. (1982-1985): *Grammaire française*, 5 vols, Akademisk Forlag.
- Tomlin, R. (1987): *Coherence and Grounding in Discourse*, John Benjamins.
- Torres Cacoullos, R. (2000): *Grammaticization, Synchronic Variation and Language Contact: A Study of Spanish Progressive -ndo Constructions*, John Benjamins.
- Uchida, M. (2002): *Causal Relations and Clause Linkage*, 大阪大学出版会 .
- Vigier, D. (2012): « *En attendant*: un cas de pragmatization », *Travaux de linguistique*, 64, pp.143-160.
- Viney, P. et J. Dalbelnet (1977): *Stylistique comparée du français et de l'anglais*, Didier.
- 和田尚明 (2007): 「『内』の視点と時制現象: 日英語対照研究」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.93-149.
- 和田尚明 (2009): 「『内』の視点・『外』の視点と時制現象 一日英語対照研究」坪本篤朗・早瀬尚子・和田尚明 (éds.): 「『内』と『外』の言語学」開拓社, pp.249-295.
- Wagner, R. L. et J. Pinchon (1962, 1991): *Grammaire du français classique et moderne*, Hachette.
- 渡邊淳也 (2001 a): 「連結辞 *ainsi* の機能について」『玉川大学文学部論叢』41, pp.161-184.
- Watanabe, J. (2001 b): « Le conditionnel du « discours d'autrui » », *Etudes de langue et de littérature françaises*, 78, pp. 216-230.
- 渡邊淳也 (2002): 「Devoir の認知的用法と条件法」『筑波大学フランス語・フランス文学論集』17, pp.189-219.
- 渡邊淳也 (2003): 「Devoir の機能について—認知的用法を中心に—」『玉川大学文学部論叢』43, pp.105-139.
- 渡邊淳也 (2004 a): 「動詞 *sembler* の機能について」『玉川大学文学部論叢』44, pp.93-112.
- 渡邊淳也 (2004 b): 『フランス語における証拠性の意味論』 早美出版社 .
- 渡邊淳也 (2005): 「Non seulement について」『玉川大学文学部論叢』45, pp.81-96.
- Watanabe, J. (2006 a): « Addition quantitative, addition qualitative et la locution *non seulement* », J. Kawaguchi et alii (éds.): *Cognition et émotion dans le langage*, 慶應義塾大学 (21 世紀 COE 心の統合的研究センター), pp.191-205.
- 渡邊淳也 (2006 b): 「フランス語の「丁寧の半過去 (*imparfait de politesse*)」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法との対照研究」『文藝言語研究 言語篇』

(筑波大学) 50, pp.41-84.

渡邊淳也 (2007 a): 「フランス語の「丁寧の半過去」と日本語の「よろしかったでしょうか」型語法」『フランス語学研究』 41, pp.54-59.

渡邊淳也 (2007 b): 「間一髪の半過去をめぐって」『文藝言語研究 言語篇』(筑波大学) 52, pp.151-175.

渡邊淳也 (2008): 「分岐的時間の表象をもちいた時制・モダリティの連関の説明の試み」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 54, pp.15-44.

渡邊淳也 (2009 a): 「時制とモダリティの連関への新たな接近法」『フランス語学研究』 43, pp.77-83.

渡邊淳也 (2009 b): 「フランス語およびロマンス諸語における単純未来形の総合化・文法化について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 55, pp.123-144.

渡邊淳也 (2010 a): 「拘束的用法の *devoir*, *falloir* の否定の多義性について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 57, pp.25-41.

渡邊淳也 (2010 b): 「フランス語と日本語における留保マーカーについて」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 58, pp.55-74.

渡邊淳也 (2011 a): 「ステレオタイプ理論をめぐって」『フランス語学研究』 41, pp.54-59.

渡邊淳也 (2011 b): 「ジェロンディフと現在分詞について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 60, pp.121-181.

渡邊淳也 (2012 a): 「叙想的時制と叙想的アスペクト」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 61, pp.191-234.

渡邊淳也 (2012 b): 「Toujours と「やはり」: ステレオタイプ再確認型の副詞」喜田浩平 (éd.) 『川口順二教授退任記念論集』(慶應義塾大学), pp.178-185.

渡邊淳也 (2013): 「単純未来形と迂言的未来形について」『文藝言語研究・言語篇』(筑波大学) 62, pp.69-106.

Wilmet, M. (1997): *Grammaire critique du français*, Hachette.

&lt;附録&gt;表：主語不一致ジェロンディフの支配節の諸特徴（全データ）

ただし、不一致例のない動詞ははじめから省いている。

調査対象形式	統辞的・意味的特徴 (複数条件の兼ね合いあり)								動詞の語彙的 アスペクト		
	非 人 称 構 文	擬 似 分 裂 文	受動態または受動的代名動詞	経験者目的補語	暗黙の認知主体	所有表現	所有表現のない部分の名詞	C'est (C'est...que 分裂文のぶっ)	非 有 界	有 界	非 動 詞 文
1. en achetant	1	0	0	1	1	0	0	0	1	1	0
2. en admettant	18	2	2	6	84	1	0	0	90	23	3
3. en aidant	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
4. en aimant	0	0	0	1	2	0	0	0	1	2	0
5. en allant	4	0	1	2	9	1	0	0	11	4	1
6. en apercevant	3	0	0	6	0	14	1	0	14	8	0
7. en apportant	0	0	0	2	1	1	0	0	3	1	0
8. en apprenant	0	0	2	1	5	15	0	0	19	5	0
9. en approchant	5	0	3	7	17	6	1	0	26	8	1
10. en arrêtant	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0
11. en arrivant	6	0	4	15	17	15	2	0	37	18	2
12. en attendant	53	5	5	17	67	11	0	0	118	16	19
13. en ayant	1	0	0	0	4	1	1	0	6	0	2
14. en bougeant	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
15. en buvant	1	0	2	1	1	2	0	0	4	1	0
16. en cherchant	3	0	1	3	4	2	1	0	5	3	3
17. en choisissant	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
18. en commençant	0	0	0	4	8	3	0	0	12	2	1
19. en comparant	2	1	1	3	3	0	0	0	6	2	1
20. en comprenant	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
21. en comptant	10	0	2	2	19	1	0	0	28	3	2
24. en connaissant	4	0	0	1	0	2	0	0	7	0	0
25. en considérant	4	0	1	3	16	0	0	0	16	6	1
26. en contemplant	2	0	0	2	3	2	0	0	7	2	0
27. en continuant	0	0	0	1	4	0	1	0	4	2	0

28. en coupant	3	0	1	1	0	0	0	0	3	1	0
29. en courant	2	0	0	1	0	0	0	0	2	0	0
30. en criant	0	0	1	1	1	0	0	0	2	1	0
31. en croyant	1	0	1	0	1	0	0	0	2	0	1
33. en demandant	1	0	1	0	4	1	0	0	4	1	1
34. en descendant	1	1	0	1	4	2	0	0	6	2	0
35. en devenant	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
36. en disant	2	0	0	2	0	3	0	0	6	2	2
37. en dormant	5	0	0	7	2	1	0	0	12	1	0
38. en écoutant	3	0	0	3	4	9	2	0	13	7	0
39. en écrivant	0	5	0	10	5	4	1	0	15	4	1
40. en entendant	0	0	0	4	7	11	0	0	16	6	0
41. en entrant	5	5	1	16	14	11	4	0	37	10	3
42. en envoyant	0	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0
43. en essayant	3	0	0	0	2	0	0	0	5	0	0
45. en étudiant	3	0	2	0	2	0	0	0	6	1	0
46. en expliquant	0	0	1	0	2	0	0	0	1	1	1
47. en faisant	6	0	6	5	14	3	0	3	27	6	2
48. en fermant	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0
49. en finissant	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0
53. en laissant	1	0	0	1	0	0	0	3	4	1	0
54. en lisant	7	1	0	9	3	11	1	0	20	6	2
55. en mangeant	0	0	0	3	3	0	0	0	0	5	1
56. en manquant	0	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
57. en marchant	0	0	0	1	2	4	0	0	6	1	0
58. en mettant	3	0	2	2	11	2	0	0	17	3	0
59. en montant	0	0	2	2	2	3	1	0	5	3	1
61. en observant	0	0	0	1	2	1	0	0	2	2	0
63. en ouvrant	0	0	2	3	0	4	0	0	6	3	0
64. en parlant	5	0	0	11	6	22	0	0	30	9	1
65. en partant	5	0	1	2	3	2	0	0	8	2	0
66. en passant	12	1	0	13	48	8	0	5	70	10	1
67. en payant	0	0	3	0	1	1	0	0	3	2	0
68. en pensant	3	0	0	11	3	4	2	0	15	5	0
69. en perdant	0	0	0	1	0	1	0	1	3	0	0
72. en prenant	2	0	2	2	6	0	0	3	13	1	0
73. en quittant	2	0	0	4	1	1	0	1	7	1	0
74. en rappelant	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
75. en rapprochant	0	0	1	1	2	3	0	0	6	1	0
76. en recevant	0	0	0	3	0	7	2	0	7	3	0



77. en reconnaissant	0	0	0	0	1	7	0	0	7	1	0
78. en réfléchissant	5	0	0	2	2	0	0	2	9	1	0
79. en regardant	9	0	0	17	8	4	1	1	20	12	0
80. en rencontrant	0	0	0	0	1	2	0	0	3	0	0
81. en rendant	1	0	0	0	0	1	0	0	2	0	0
82. en rentrant	0	0	0	1	6	2	0	0	6	2	1
83. en répondant	2	0	0	1	1	0	0	0	3	0	0
84. en restant	1	0	0	3	1	0	0	0	3	1	0
85. en retournant	0	0	0	1	0	2	0	0	2	1	0
86. en retrouvant	0	0	0	2	0	2	0	0	2	2	0
87. en revenant	0	0	0	2	3	5	0	1	8	2	1
88. en riant	0	0	1	0	2	0	0	1	4	0	0
89. en sachant	0	0	0	1	0	1	0	1	2	0	1
90. en s'approchant	2	1	1	2	1	1	0	0	6	2	0
91. en se couchant	1	0	2	0	0	1	0	0	2	1	0
92. en se demandant	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
93. en se disant	0	0	0	0	0	1	0	0	1	0	0
94. en se levant	0	0	0	1	0	2	0	0	1	2	0
95. en se promenant	1	0	0	2	1	0	1	0	2	1	0
96. en se rappelant	0	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
99. en se retrouvant	1	0	0	3	0	1	0	0	2	2	0
100. en se trouvant	0	0	0	1	0	1	0	0	1	1	0
101. en sentant	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
102. en songeant	4	0	0	7	2	2	1	1	11	2	1
103. en sortant	3	1	1	9	7	4	0	0	15	6	2
104. en suivant	4	0	2	2	4	0	0	1	9	1	2
105. en supposant	25	1	2	3	78	3	1	5	90	18	8
106. en tenant	5	0	4	0	11	0	0	0	19	3	0
107. en tirant	0	0	0	0	2	0	0	0	2	0	0
109. en touchant	1	0	0	1	0	4	0	0	4	1	0
110. en tournant	0	0	0	1	1	0	0	0	0	2	0
111. en travaillant	1	0	0	1	0	0	0	0	0	1	0
112. en trouvant	0	0	0	2	0	1	0	1	2	2	0
113. en venant	1	0	0	0	4	4	0	0	7	2	0
114. en vendant	0	0	0	1	0	0	0	0	1	0	0
115. en vivant	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	0
116. en voulant	0	0	1	1	0	3	0	0	3	2	0
117. en voyageant	1	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0
118. en voyant	7	0	4	14	10	36	4	1	49	24	1
総 計	269	24	70	283	573	289	28	31	1096	307	70

調査対象形式	叙 法 お よ び 時 制																不 一 致 の 総 数
	現 在 形	複 合 過 去 形	半 過 去 形	大 過 去 形	単 純 過 去 形	前 過 去 形	単 純 未 来 形	前 未 来 形	条 件 法 現 在 形	条 件 法 過 去 形	接 続 法 現 在 形	接 続 法 過 去 形	接 続 法 半 過 去 形	接 続 法 大 過 去 形	命 令 法	非 定 型 ま た は 非 動 詞 文	
1. en achetant	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
2. en admettant	46	2	13	0	2	0	12	1	25	6	1	0	0	2	0	6	116
3. en aidant	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
4. en aimant	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
5. en allant	9	0	3	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	16
6. en apercevant	1	0	1	1	18	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	22
7. en apportant	2	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
8. en apprenant	4	2	1	3	5	0	5	0	2	1	0	0	0	0	0	1	24
9. en approchant	11	0	11	1	9	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	1	35
10. en arrêtant	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2
11. en arrivant	7	3	11	4	27	0	2	0	0	0	0	0	0	0	1	2	57
12. en attendant	60	2	43	4	12	0	10	0	3	0	0	0	0	0	0	19	153
13. en ayant	2	0	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	8
14. en bougeant	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
15. en buvant	3	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6
16. en cherchant	5	2	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	11
17. en choisissant	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
18. en commençant	6	0	2	0	6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	15
19. en comparant	5	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	9
20. en comprenant	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
21. en comptant	14	0	13	1	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	34
24. en connaissant	4	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	7
25. en considérant	15	2	2	1	0	0	0	0	2	0	0	0	0	0	0	1	23
26. en contemplant	4	0	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
27. en continuant	3	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	6
28. en coupant	1	0	2	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	4
29. en courant	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
30. en criant	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
31. en croyant	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	3
33. en demandant	0	0	4	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	1	6
34. en descendant	4	2	0	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	8
36. en disant	2	1	2	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	2	10
37. en dormant	5	2	3	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	13
38. en écoutant	5	1	6	1	4	0	1	0	2	0	0	0	0	0	0	0	20

[illegible]

90. en s'approchant	4	0	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	8
91. en se couchant	0	0	0	0	2	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	3
93. en se disant	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
94. en se levant	0	0	0	0	3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3
95. en se promenant	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
96. en se rappelant	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
99. en se retrouvant	0	0	1	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
100. en se trouvant	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
101. en sentant	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
102. en songeant	3	1	5	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	14
103. en sortant	10	0	4	1	5	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	23
104. en suivant	5	3	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	2	12
105. en supposant	34	2	11	0	0	0	9	0	45	5	1	0	0	1	0	8	116
106. en tenant	11	1	3	1	0	0	3	0	2	0	0	0	0	0	0	0	21
107. en tirant	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
109. en touchant	0	1	3	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	5
110. en tournant	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
111. en travaillant	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1
112. en trouvant	2	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
113. en venant	6	2	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9
114. en vendant	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
115. en vivant	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
116. en voulant	1	1	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4
117. en voyageant	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	1
118. en voyant	19	2	10	1	29	0	2	0	2	1	0	0	0	0	1	7	74
総 計	512	66	302	34	230	3	75	1	106	13	45	0	1	5	6	83	1482